

正・政・清・聖・性・醒

炉ばたセイ談



平成30年秋号

## 巻頭言

### 第零次世界大戦

澁谷 繁樹

日露戦争は、第零次世界大戦の別名を持つ。戦争の規模と意味、関わった国の数で第一次世界大戦に先立つ最初の世界戦争とみなす観点からの呼称になる。一九〇四年二月に始まり一九〇五年九月に終わった戦争の一つの舞台となった旅順二〇三高地には、二度、足を運んだ。なんの変哲もないただの丘である。かき氷屋があり、麓から頂まで駕籠かき役を務める真つ黒日焼けの筋張った筋肉を持つニイチヤン達が客引きはしているけれども、観光名所の雰囲気はない。二十世紀初頭、新参者の日本を含む列強は、中国を分割統治しよう、ここはウチのもんで、あそこはアンタンチと勝手な思惑を、ヒトンチの庭先で張り巡らしていた。中国にしてみたら迷惑千万、失敬な話というしかないし、乃木とかステッセルとか懐旧談にも名所化にも興味はないのだろう。父親が大日本帝国陸軍の学徒動員組だった日本人は、遠く旅順口を望みながら、複雑な表情の中国人の友人と、ロシア太平洋艦隊は自滅とか二〇三も苦労して手に入れる必要はなかったとか、純軍事的な会話で居心地の悪さを紛らす。なのに、なぜ二度も、というのは、二〇三で風に吹かれていると、日口はもとより中国、米英仏独の歴史が目の前を流れていく気がするから。近代の屍を積み重ねた零次大戦の土地がまたうねりでもしているのか。また来いよ、二〇三の弦音が聞こえている。(短ばたセイ談会会長)



## 中央線の思い出

### 森崎くんと八王子へ



入院 重宏

(東京の) 中央線と言えば、子供時代からずっとオレンジ一色の車両と決まっていた。

コスト削減で車両全部オレンジ一色塗装から一部のみオレンジ塗装に変更してから、もう12年くらいになるけれど、いまだに中央線と言えばオレンジ一色の車両が僕にとっての中央線。オレンジ一色の車両でなくなるのであれば、いっそのこと「中央線」という名前も変えて欲しかったくらいだ。

オレンジの車両が見られなくなつて本当に寂しい。

森崎くんと八王子へ

この話は、僕が小学校の3年生の秋のこと。年齢9歳、昭和45年(1970年)大阪万博の年だから、今から半世紀近くも前のことだ。当時僕は東京都の西部の日野市に住んでいた。「日野市豊田866」簡単な住所だから今でも憶えている。

さて、ある秋の日の学校の帰り道、僕は同級生の森崎くんに「遠くに行かないか」と冒険話をもちかけられた。

「いいよ。どこに行こうか」

「八王子」と森崎くん

「・・・」

僕は森崎くんの返事に驚いて声が出なかった。八王子市は日野市の西隣に位置する、僕にとってはまるで「夕日が沈んでいく遠くの国」だった。

「八王子に行ってみよう」森崎くんは僕の

目を見つめて言った。

「どうやって行くの」

「電車で」

森崎くんは、学校帰りに電車に乗って隣町に遊びに行こうなんて、あまりに非常識なことを平然と言つてのけた。

「お金がないよ」と僕

「俺が持つてる」

家族とだつて減多に乗らない電車に森崎くんと二人で乗つて、知らない土地に遊びに行くなつて、とても恐ろしく思えたけど、行けない理由もなかったし、それより何より、なんだか森崎くんに「お前にその勇気があるか」と試されているような気がして、僕は八王子に行く決心をした。

当時、国鉄の小学生の初乗り料金は、確か5円だった。森崎くんは往復の運賃とプラス小遣いとして僕に40円くれた。昭和45年

のある秋の日の多分午後3時頃、中央線豊田駅から身長125センチ足らずの子ども二人が八王子に向かって旅立ったのだつた。

八王子駅は、豊田駅の隣駅だけど結構距離はある。僕は大きな不安と小さな期待で窓の外の景色を見ていた。森崎くんもちよつぱり後悔しているようだった。

生まれて初めて八王子駅を降りた。森崎くんも多分初めてだったと思う。わが町わが駅豊田駅とのあまりの違いに二人とも息を呑んだ。八王子駅は巨大な駅だった。改札を出てさらに驚いた。自分の住んでいる町の隣にこんな大都市があるなんて夢にも思わなかった。振り返れば、そこにいつも八王子駅が見える距離の範囲内で森崎くんと僕は隣町を見学した。

お好み●●20円より

いつもはとっくにおやつを食べ終えている時間で、二人ともお腹がとつても空いている。そこに、まるでタイミングよく目の前に

「お好み〇〇20円より」の看板が現れた。

「なんて書いてあるんだろう」と森崎くん。

僕は、まだ習っていない「お好み」を「このみ」としつかりと読むことができた。●

●は読めなかったけど、「お好み」だから、当然「あれか」とピーンときた。

「お好み焼きだよ」

「お好み焼きが20えんっ！お腹空いたから食べようか」

森崎くんは安さに驚いて即提案してきた。

「うん、20円なら帰りの電車賃も残るから食べよう」

森崎くんと二人で店の引き戸に手をかけて「せーの」で思い切り開けた。おじさんが3人、おばさんが2人いて、一斉にこつちを

向いた。

「お好み焼きください」僕ら二人は元気よく大きな声で叫んだ。

一瞬の間をおいて、まるでお店が壊れるんじゃないかと思われるくらいの大爆笑が起きた。お店はまだ準備中だったようで、お腹を抱えて大笑いしている5人の大人はみんなお店の人だった。

「坊やたち、こつちへおいで」カウンターの中のおじさんが笑顔で僕らを呼んだ。

森崎くんと僕は店内をきよろきよろ見て、はじめてそこがお寿司屋さんであることを理解した。時すでに遅し。おばさんたちが寄ってきて僕らの手を引っ張ってカウンターまで連れてきた。カウンター席にちよこんと座らされた僕は大人たちに取り囲まれて「どこから来たの」などと質問攻めにあつた。何か聞かれて、僕らが何か答えるたびにおじさん

おばさんは大笑いをして喜んだ。僕は『この人たちは子どもと話をしたことがないのだからか』と不思議な気持ちになった。

「お好み焼きは無理だけどね」と言っつて、カウンターのの中のおじさんが僕ら二人に鮪をひとつづつ握ってくれた。それはそれはきれいな赤身の鮪だった。当時、お寿司なんて滅多に口にするにはなかったし、僕はお寿司屋さんでお寿司を食べることもなかったから、職人さんが握り寿司を握る姿を見るのは初めてのことだった。笑顔の大人たちに囲まれて、なんだかとても照れくさくて恥ずかしかつたけれど、真っ赤な鮪の握り寿司はとっても美味しかった。

「それじゃあ20円づつね」鮪の握り寿司は20円じゃなかったはずだけど、今思うとなにしる粋な寿司屋だった。お店の大人5人全員が店の外まで僕ら二人を見送ってくれた。

「気をつけて帰るんだよ」

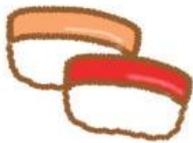
「今度はお父さん連れてくるんだよ」

握り寿司ひとつだったからお腹一杯にはならなかったけど、なんだか気持ちよくて胸が一杯になった。僕の記憶はそこでふつり終わっている。

考えてみたらあんないい旅は、あれ以来なかったかもしれない。

お寿司屋さんのカウンターでほんとの「お好み」を握ってもらったのも実にあれから20年くらい後だった。

(キリン社会保険労務士事務所代表)



## 明治維新について思うこと



### 十五代 沈 壽官

鹿児島は大河ドラマ「西郷どん」ブームの真つ最中である。本来は明治維新150年という節目の年であり、明治維新（戊辰）とは一体何だったのか熟考する年であった筈なのだが、そんなものは、何処かに吹っ飛んでしまったかのような、テレビ版西郷どんブームだ。

時代考証も怪しげで、ストーリー展開無茶苦茶のNHK版西郷どん。小生も3話くらいまでは我慢して見ていたが、藩主の養女である篤姫が下級武士である西郷に「西郷どん、一緒に逃げもんぞ」と言ったあたりから、あ

まりのあり得なさに呆れ果てて、ついに観ることもなくなった。

しかし、世の人々は大河ドラマのロケ地に続々とやってくる。お約束なのだろう。上滑りの活性化という点においては今のところ極めて順調である。ただ、あのドラマを見て「へえー、そうだったんだ」と思った視聴者も多い事と思うと恐ろしい話だ。

そこで、自分なりにあの時代を考えてみた。

薩摩は、歴史的に台風の常襲地帯であり、桜島の降灰の被害も大きい。従って、シラス台地では米が思うように収穫出来ない。更に武士の数が異常に多く、島津家による將軍家や諸方の有力大名との姻戚関係維持などでも費用がかさむ。又、徳川家から警戒されていた為、多くのお手伝い普請や遠路の参勤交代などの負担が藩財政を圧迫し、当時の庶民の

暮らしは塗炭の苦しみの中にあつたという。

そのあまりの酷さを見かねた越中富山の菓種商が幕府に進上し、藩は幕府から厳重注意を受けたこともある。

そんな中で生き残りを賭けて薩摩藩は海外へと交易の輪を広げて行ったのだ。

薩摩藩は朝鮮出兵から10年後に三千の兵で奄美の島々を蹂み潰し、琉球に到る。そして、王府首里城を陥落させて琉球国を薩摩藩の植民地とした。その辺りを皮切りに、一気に海洋国家へと変貌していく。朝鮮、清、その他東南アジアの国々がその対象である。

薩摩は国内においては、頑なに閉鎖的であつたが、アジアに対しては実に開かれた国へと変わっていった。その蓄積が、幕末期、時代を動かす原動力になつたのだ。それは、単に経済的な豊かさのみならず、北東アジアに張り巡らした情報ネットワークの強さでもあ

つた。

幕末期、欧米各国から迫られる開国要求に耐えている最中、起こつたアヘン戦争が薩摩藩指導部に強い衝撃を与える。永遠の帝国と信じていた清国がいとも簡単に英国の近代兵器の前に潰えたのだ。しかも、その開戦の理由は阿片の押し売りである。民主主義誕生の国などと言うが、その実態は極めて悪いものである。

これにより危機感を強くした藩主島津斉彬は大規模な近代化事業に着手する。こうした反応は薩摩が取り立てて開明的だったからだとは思わない。単に火元に近かつた事に起因するのだ。東北には東北の秀才が当然ながら居る。ただ、火元からは遠かつた。

斉彬は東洋最大のコンベンナート建設を開始した。しかも、外国から機械や技師を招くのではなく、参考文献のみを取り寄せ、それ

を自藩で翻訳、さらには在地の職人や士族に実行させたのだ。その領域は決して軍事部門に偏ることなく、人々の暮らしに資する全般的殖産興業政策であった。

そして、それらの備えが威力を発揮したのが薩英戦争である。

神奈川県生麦村で起きた生麦事件に端を発する薩英戦争で、薩摩は英国の優れた科学力を身をもって知ることになる。その時点で攘夷はあっさり捨てた。それどころか、優秀な16名の青少年達を偽名でイギリスに留学させたのだ。イギリスも又、そんな薩摩に強い関心を持った。

私は維新について思う時、このイギリスとの出会いが最も大きな意味を持つと思っ

る。  
インドで生まれた仏教が、中国大陸を経て

朝鮮半島から、6世紀に日本にもたらされる。当初、神道と激しく対立するも、やがて調和し日本独自の哲学に至る。天台本覚論である。「草木国土悉皆成仏」とは正に日本人だけが持ち得た哲学であろう。一方で、ゴラン高原に生まれたユダヤの一神教は当初、ギリシャ哲学と激しく対立するが、これも調和し、神の意志を証明する為の科学を作り出し、イギリスでは産業革命が起こる。

この全く異なるユーラシア大陸の西の果てのイギリスと東の果ての日本が幕末に出会い、争い、そして調和したのである。

それまでの日本人、取り分け武士階級は如何に死ぬかが絶対命題であった。切腹というのは、世界で類例のない自殺の作法である。しかし、キリスト教の教えでは、人は命ある限り生きなければならぬのだ。この死生観の違いから、日本人の若者達は初めて「生き

る事」に目覚めたのではないか?と思うのだ。避けがたい運命としての「死」に対して、如何に生きるのかを初めて問い始めたという事だ。

維新の草莽の志士たち全てが取り立てて裕福であった訳ではない。又、特別に優秀であった訳でもない。その彼等を突き動かしたエネルギーの元は、時代にもたらされた「生」への渴望ではなかったか? そして、彼等その一片の志が時代を変えた。

地勢上の違いによる感覚の違いはやがて内戦という悲劇を生む。戊辰戦争だ。その先頭に居たはずの薩摩ですら西南の役で叩き潰されてしまった。

改めて思うことは、今のように情報がスピードでなかったあの時代、高熱にうなされた様に駆け抜けた人々、それを突き動かした

パワーの元は、未知なる世界との出会いであった。

相容れないものと争い、やがて調和した時、人は凄まじいエネルギーを持てるのだと思う。明治維新が真に正しかったのか?

未だに悩ましい。しかし、日本が世界という海に飛び込み、泳ぎ切る為の一つの道であった事は間違いない。



## 留学生からの質問事項



宮下 亮善

アジア地域でボランティア活動を顕彰する『西日本国際財団』の事務局からの申し出で、明治維新150年にあたり、西郷隆盛子孫の話を聞きたいと相談を受けました。それは、福岡の各大学に來ている留学生からの要望だとのことでありました。早速、曾孫である西郷隆夫氏を紹介しました。

この西日本国際財団は、毎年、福岡在住の留学生を対象に九州各県を回り異文化交流を図っています。今回は鹿児島で、『沈寿官窯』と『南泉院』に30名の留学生が訪れ交流を図りました。

そこで、西郷隆盛について、事前に質問事項が届きました。

(1) ラスト・サムライについて知りたい(インド)。

(2) なぜ西郷隆盛はラスト・サムライと呼ばれているのか(インド)。

(3) なぜ日本のサムライは突然消滅したのか(インド)。

(4) 現代日本においてもサムライの子孫は生きていると思うが、現代におけるサムライの意味とは何か、なぜなら江戸時代にはサムライにとって富や金はあまり重要ではなく、名誉や忠誠心を重んじており、日々の生活は妻が取り仕切っていたが、現代ではお金が個人が生きていくのに最も重要だと信じられているから(インド)。

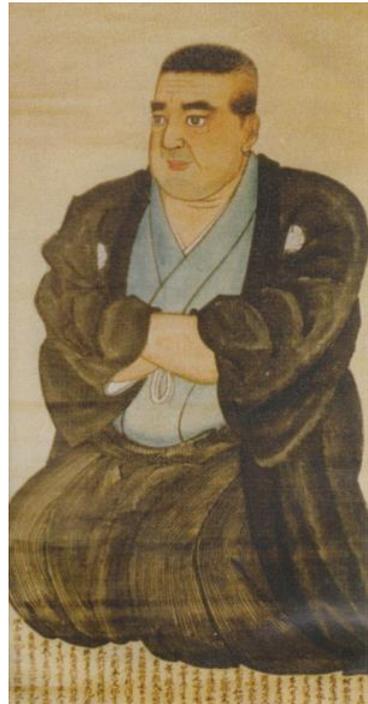
(5) 西郷隆盛の生きた時代、人生、生きざ

まについて知りたい（インド）。

(6) 西郷隆盛はどうやって当時の会津藩とともに長州藩から京都御所の天皇家を守り抜くことができたのか（インド）。

(7) なぜ西郷隆盛は征韓論を唱え、韓国を開国させようとしたのか（インド）。

(8) 西郷隆盛の最後について知りたい。西郷は西南戦争の最後に傷を負い別府晋介に介錯を頼み自殺したとされているが、一部の学者は西郷は傷を負ったときすでにしやべることができなかったという説をとなえている。そのとき、仲間の武士たちが名誉ある死を西郷は選んだとして死んでから介錯したとの説もある。本当はどうなのか、西郷隆盛の子孫の方にお聞きしたい（インド）。



『西郷どんの肖像』  
肥後直熊・画

(9) 西郷隆盛は映画の『ラスト・サムライ』のモデルになっていると思うが、映画はどれだけ真実に近いのか（韓国）。

(10) 西郷隆盛の二度目の追放の理由は何ですか、久光公からの申し出を拒否したからですか、その後、久光公の申し出を受け入れたから1864年に釈放となったのですか（ヨルダン）。

(11) 西郷隆盛が亡くなった原因は何ですか（インドネシア）。

(12) 1877年の薩摩士族の反乱の際、西郷隆盛は日本の将来について、どういうビジョンを持っていましたか(ヨルダン)。

(13) 西郷隆盛の反乱とその後の経過は薩摩の人たちの生活にどのような影響を与えましたか(ヨルダン)。

(14) 薩摩の人たちは日本の伝統を守るサムライとして西郷隆盛を尊敬していたのでしょうか、それとも西郷が自分の国を作るべく野心を持った反乱分子とみていたのでしょうか(ヨルダン)。

以上、14項目についての質問事項。留学生たちの勉強ぶりが伺えます。

小生、K大学の非常勤講師として教壇に立っていますが、この14項目の質問事項を学生たちに紹介し、どれだけ答えられるか質問してみました。誰も挙手するものがない、

何回も促すが返事がない。『君たちと同じ現役の留学生だよ、誰も答えられないのか』質問を変えて『西郷隆盛は知っているか、どんな人物か』との問いにも返事なし、どうにも話がかみ合わない。受験勉強偏重の弊害が如実に現れている現状を思い知らされ、頭を抱え込む思いがした。

これでは、日本人としての『誇り』を持つどころではない。日本人が日本の歴史を外国人に教えてもらう時代が到来しているかも知れない。受験対象外の科目は忘れさられる。歴史、地理などの基礎知識は自国、他国をも理解する上で不可欠なものである。

留学生たちは、日本に来る前に、もしくは、日本に来てから日本の歴史を、西郷隆盛のことを、学んだものと思われます。広い教養をもった日本人の育成が成されていない。

ここに、新聞の掲載記事を抜粋して、紹介

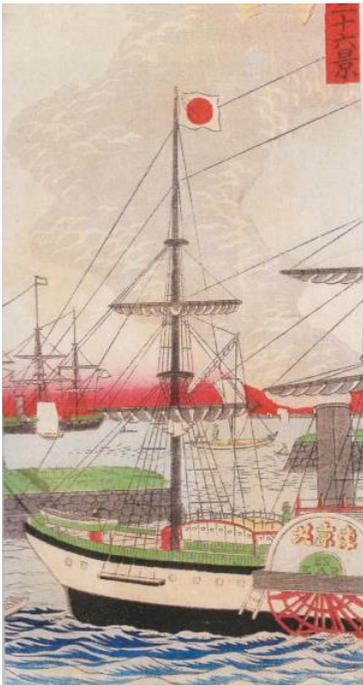
します。

『教室の現実』——「アシカガ・ヨシミツ  
つて知っている」、イギリス中部にある名門ウ  
オーリック大学。4年前、国際政治を学ぶた  
め留学していた男性(24)は、日本の歴史  
に関心を持つ外国人学生から聞かれ、質問に  
窮していた。英語が苦手だったわけではない。

『足利義満』の名は頭に浮かんだが、室町幕  
府の將軍だったことも、金閣寺を造営したこ  
とも思い出せなかったのだ。「トクガワ・イエ  
ヤス」の質問にも、「いたね」と

返すのが精いっぱいだったとい  
う。3月に大学を卒業した男性は、

「日本史の基本や流れを身に着け  
ていれば説明できたのに、高校ま  
で何を学んでいたのか情けなかつ  
た」と振り返る。留学する多くの  
学生を指導して来た早大国際教養



明治維新後の1870年太政官布告  
で、商船に日の丸を掲げることが  
定められ、正式に国旗となった。

学部の森川友義教授(54)は、「海外でのコ  
ミュニケーションの場で日本の話ができない  
留学生が多い」と指摘する。「歴史や文化につ  
いて断片的に覚えていても大きな流れをつか  
んでいない。説明したり意見を述べたりする  
訓練を積んでいないからだ」——入試対策で  
得た学力と、国際化が進む社会や大学で求め  
られる学力に深刻なギャップが生じている。

海外生活を経験した人々や、海外で活躍す  
る人々にとって、祖国なり、自国なりを外か

らみると否応なく、日本人とは、日本文化とはと、自然に意識するものである。ところが、海外に出て「日本人はどのような人々ですか」と問われて、どのように答えたらよいものか、説明できる日本人がどれほどいますでしょうか。

たとえば、国旗や国歌の意味、浮世絵、雪月花の心、茶道、華道など、どのように誇りを持って、語るができるでしょうか。

かつて、ミャンマーの山岳地域で教育支援活動をしている現地のプロジェクトマネージャーが、一年の仕事を終えて帰国しました。その彼女が「和尚、非常に恥ずかしい思いをしました。自分は日本人でありながら、日本のことを、何一つ話すことができなかった」と、語っていました。

国際交流とか、国際貢献とか、昨今よくいわれておりますが、海外交流の隠れた大きな

目的は、自国の文化を学び『日本人とは何ぞや』と、自覚することでもあります。自国の文化や歴史を尊重するということは、他国の文化や歴史を尊重するということにも通じるのです。

気候や風土や歴史が異なれば、文化、宗教、言語、民族性、国民性、人々の生活様式も異なり、人生観、歴史観、価値観も多種多様な感性が育まれてくるわけです。

文化とは、「文物教科」つまり、それぞれの地域の気候風土の中で培われた人々の感性であるといえます。換言すれば、織りなす綾の飾りの模様といえます。文明とは、その地域の文化が、時間的、空間的広がり形成し、その時代をリードする感性が形成されていく『態』と、理解されます。

いずれにしても、自国を知ることが、彼の国を知ることになり、そのことが相互理解を

深め、国際貢献に資するものと思います。昨今は、クロスカルチャー・文化交流の時代といわれておりますが、決して、それぞれの文化を平準化・均質化することではなく、それぞれの文化の優劣をはかるものでもなく、それぞれの特性を尊重し、よりよく理解し、国際社会に貢献する時代でもあります。

『互いに交われば、相互に理解できると単純に考えている日本人があまりに多い、世界はもともとと狭くなり、お互いに肩をふれあい、話し合う機会はますます多くなり、日常のこととなるかも知れない。だが、それが相互理解に通ずるなどと、絶対に安直に考えてはならない。もし、そうであるならば、ユダヤ人は2千年も西欧人と肩をふれあつて生きていくのである。』——イザヤ・ベンダサン  
の言をまつまでもなく、いまだに中東問題は混迷を深めている。また、日本を取り巻く東

アジアにおいても独裁者が跋扈する国際情勢を俯瞰するとき、冒頭の留学生14の質問事項にたいして、誰一人明確な意志をもつて答えてくれなかった日本人学生に失望と、この国の将来に危惧を抱く思いでした。

NHK大河ドラマ『西郷どん』で盛り上がっております。観光もよし、経済効果もよし、鹿児島にあつて西郷隆盛を知らない人も多くいます。時代考証がどうの、西郷さんと月照和尚がどうのと、世間は姦しいですが、あくまでもテレビドラマの話、何も憤慨する必要ありません。この『西郷どん』を気に、学ぶ好機と受け取るべきと思います。

『南洲翁遺訓』に、「正道を踏み、国を以て弊るるの精神なくば外国交際は全かるべからず。彼の強大に委縮し、円滑を主として曲げて彼の意に順従する時は軽侮を招き、好親却て破れ、遂に彼の制を受くるに至らん」。西

郷どんの遺訓、今に光るものがあります。

かつて、韓国の大学生と2週間ホストファミリーとして生活をともにしました。彼ははつきり西郷隆盛は「征韓論者」だから、韓国では良く評価されていないと。果たして、これにはつきり反論する日本の大学生がいるのか心もとないものを感じています。

大学での海外研修の事前講義では、『日本人とは何ぞや』『尊敬する歴史上の人物は』『あなたの宗教は』などと問われたら、即座に答えるだけの自信と見識を持つように事前に学習するように指導しています。

外国人との付き合いや交流には、余計な『忖度』は必要ありません。はつきり自身の考えや意見を述べることは大事な事であるし、かえって、信頼され尊敬もされます。このことは、小生自身の経験によるものです。

広い視野を持った若い教養人の育成が急

務かと、つくづく感じる今日この頃です。

明治維新150年の記念事業が企画されています。それぞれに意義のあることとは思いますが、残念ながら、次代を担う人材育成の記念事業が見受けられません。

郷中教育の殿堂をつくり、学校教育のカリキュラムと連携し、鹿児島独自の教育システムはできないものでしょうか。萩の明倫館小学校における『吉田松陰先生』の教えの学び、足利学校の『論語』の素読など、現代社会に先人の遺訓が活用されています。『教育は建国の基礎』です。(天台宗大雄山 南泉院住職)



## 西郷隆盛と肥後の菊池氏



中山とし子

### 一、序章

西郷隆盛は、三十二歳の時、月照との入水騒ぎで塾居を命ぜられ、大島（現奄美大島）に最初の配流の身となる。そして、そこで「菊池源吾」と改名する。これは、「吾の源は菊池なり」を意味するようだ。「菊池」とは、現熊本県北部、菊池市のあたり一帯のことを言い、一〇七二年、太宰府からここに下向した藤原氏一族が、南北朝時代を経て、室町期まで治めた土地である。西郷家の先祖が菊池氏に始まることを西郷は自覚しており、大島での変名に「菊池」を用いたと想像される。

「菊池源吾」には、祖先に対する西郷のプライドがあったとわかる。そこで、この小文では、西郷隆盛が誇りを持つ父祖の地としての菊池一族のことを明らかにし、わかりにくいと言われる西郷の実像の一端に迫りたい。

二、**菊池市七城町砂田字宮ノ前西郷部落**  
「西郷」の地名は今も菊池市の加茂川村の一部落の名として残存している。

二〇一八年五月二十日、聖護寺護持会会長様のご案内によって、石碑の立つ**菊池市七城町砂田字宮ノ前西郷の地を訪れた(写真1)**。徳富蘇峰筆で「西郷南洲先生祖先発祥の地」と書かれている。この部落は、迫間川に臨んだ平野の中であって、十八外城の一つに数えられる増永城址があり、西郷太郎の墓と称する五段切の墳墓及び、古井戸やら濠(ほり)の跡などが現存している。(資料① p19)  
同じ場所に立つ立看板(写真2)には、「こ

を、簡単に述べておく。

の 一 帯 は 菊 池 十 八 外 城 の 一 つ 増 永 城 址 で、 初 代 の 城 主 西 郷 太 郎 政 隆 は、 菊 池 氏 初 代 則 隆 の 子 で 菊 池 一 族 で し た。 そ の 後、 二 十 六 代 の 西 郷 久 兵 衛 昌 隆 の 時、 薩 摩 に 移 り 住 ん だ と い う 記 録 が あ り、 初 代 西 郷 太 郎 政 隆 か ら 三 十 二 代 目 が、 西 郷 隆 盛 で す」と の 文 言 が あ る。 昭 和 二 十 七 年 十 月 の 建 立。

三、西郷の流罪から見えてくるもの

良く知られていることであるが、西郷隆盛

が大島に流され変名を余儀なくされた経緯



写真1 石碑と著者



写真2 西郷南洲先生祖先発祥の地の立看板

安政五年（1858年）七月、島津斉彬が五十歳という若さで急死したことにより、西郷隆盛は殉死を望むようになる。これを止めたのが、熱烈な尊攘派であった僧・月照（四十六歳）である。二人は將軍継嗣問題では共に一橋慶喜を推す間柄であったことから、幕府に命を狙われることになる（安政の大獄）。西郷は、恩人の月照をかくまうため薩摩に連れて行こうと考えるが、ここでは、斉彬の異母弟、島津久光が、公武合体論を唱えていた。西郷らをかくまうて幕府に睨まれることを恐れた久光は、国境で月照を切り捨てるようひそかに指示を出す。もはや先がないことを覚悟した二人は、錦江湾に入水する。西郷吉之助三十二歳であった。

この後、西郷だけが助かるわけだが、自分だけが生き残ってしまったとの悔悟の念から、「自分は一度死んだ人間であり、この体

は自分のものであつて自分のものでない」との諦念に至ったことは考えられる。以後の人生は他のために生きる、との思いもあつたかもしれない。西郷には、時にわが命を投げ出すように相手の懐に飛び込んでゆく交渉のやり方が見られる。（例…1864年、第一次長州征伐の後の処理で、最後の抵抗をしていた長州藩士説得のため一人で下関に乗り込み、直談判をして要求を飲み込ませることに成功した）天に命を預けた人ならではの行動であろう。

その後、生き残った西郷のことが幕府に知られることを恐れた藩は、西郷が死んだことにし、墓を建て大島に蟄居させることにする。名前も変えるよう命令を受けた西郷は、「菊池源吾」と改名するわけである（他に大島三右衛門とも改名した）。菊池とは鹿児島ではあまりなじみのない苗字だが、最近まで、西

郷と菊池氏との関連に特に注目する書物は、寡聞にして知らなかった（資料③及び資料④に関連記事あり）。西郷は、島で結婚した愛加那との間にできた二人の子供たちにも、「菊次郎」「菊子」と菊を入れた名前をつけている。

資料③によると、西郷家の家紋は、「抱き菊の葉に菊」というもので、左右二枚の菊の葉が中央の十六枚の菊の花を抱いているように見えるデザインであったが、明治二年（1869年）に菊花紋章が皇室の公式紋章とされるに伴って、西郷家は、菊の葉三枚の紋に変えたようである。ちなみに、菊池氏の家紋は、「鷹羽紋」で、西郷家とは全く異なる。しかし、ネットの情報によると、菊池家にも菊を丸で囲んだ替紋が伝わるそうである。

#### 四、菊池氏とはどのような氏族か

では西郷が誇りとする菊池一族とは、どの

ような人々であろうか。

実は、西郷家の家系図は、一六八八年に菊池西郷家二六代・久兵衛昌隆が島津氏に仕えてからとなっている。資料③によると、「久兵衛、某家ヨリ分立セシヤ其出ル処ヲ知ラス、只御記録書ニアル系図ヲ得テ記ス」との西郷の手写しと思われる註が添えられているが、資料④の20頁によると、二五代までは、肥後西郷家は細川氏に仕えたりしながら（一六三二年頃）、肥後にとどまっていたであろうことがわかつている。

伝わっている肥後西郷家系図が正しいなら、薩摩西郷家系図ときれいに繋がることから、薩摩西郷家が菊池氏を祖とすることは否定できない。これを、資料①の「藤原北家菊池系図」（p342）と、「第九 西郷家」

（p18・19）の中から更に検討する。

（一）、「藤原北家菊池系図」によれば、藤

原道隆から下ること四代目の則隆が肥後の国菊池郡に下向し（1072年）菊池則隆と称したのを菊池氏初代とする。その次男政隆は、西郷太郎と称し西郷家の先祖であろうとみられている。ところが、ややこしいことに、系図には次男の位置に記されているが、一説には、長男の位置に記されている経隆は三男であり、三男の位置にある保隆の弟であったという。そうなると、次男の位置に書かれている菊池政隆（西郷太郎）が長男ということになり、なぜ三男の経隆を長男として菊池家の跡取りにしたのかとの疑問が残る。しかし、地域によっては、末っ子を跡取りにする風習はあちこちに現代でも残っているし、親との相性や能力の差異によって跡取りを選ぶのは親の意志一つのところがあること。又、系図では三男に位置している保隆は、「小島次郎」と称し、その子・経保も「小島次郎」と称し

たので、実際は次男の可能性が高いこともこの説を裏付ける。

以上のような情報から、西郷太郎政隆は長男であった可能性があり、この人物は、菊池十八外城の一つ、増永城の初代城主となる。

この城のあったあたりが、西郷という地域であったために、西郷姓を名乗ったものである。ちなみに、ネットで引いてみると、「西郷…にしごう」という土地は出るものの、「西郷…さいごう」という地はヒットせず、ありふれた地名ではないことがわかる。

(二)、菊池氏十二代・寂阿入道武時の父は、西郷弥四郎隆盛と称した人だったが、ひるがえって、薩摩の西郷家九代目は、西郷吉兵衛隆盛。その長子も十代目吉之助隆盛と親子で隆盛を称したのは、武時公を追慕する思いがあったものか（資料①19頁）。西郷家は後醍醐天皇の忠臣、菊池氏の子孫である、と幼

いころより聞かされて育った西郷には、「勤皇」の意識が自然と育っていったのかもしれない。菊池氏は、十二代武時公と十三代武重公の時に大きく躍進した。この時代に、篤く佛教を信奉し、参禅に励み、後に述べる大智禪師の指導を仰いだという歴史がある（資料②）。

もつとも、西郷の父・吉兵衛と長男の吉之助が「隆盛」という同じ諱を持つのは、明治二年、西郷に辞令を出す際に、友人が誤って父の諱を答えたため、そのままになってしまったという経緯がある（資料③）。

(三)、十二代武時公は、建武の新政を成した後醍醐天皇の論旨に応じて戦ったが、一三三三年裏切りに遇い壮烈な戦死。その嫡男十三代武重公は肥後一国の守護を任じられ、尊王に命をかけた父の意志を継いで、後醍醐天皇の側近くに仕え各地を転戦。弟武敏と共に足

利勢に徹底抗戦した。次いで、十五代菊池武光公（武重の腹違いの弟）も、後醍醐天皇の皇子・懐良（かねなが）親王を擁護し戦ったという経緯から、菊池氏は代々朝廷を重んじる立場を貫いたと言える。ここが西郷の立場と通じるところである。あるいは、これを知っていた西郷が、先祖に倣って矜持を貫いた生き方をしたのだろうか。

(一)、(二)、(三)を総合的に検討すると、やはり西郷家は、肥後の菊池氏を祖とすると推定せざるを得ない。私は、この一族のDNAが少なからず西郷の中にもあったのではないかと、この仮説を持っている。先に述べたように、菊池氏は、徹頭徹尾尊王派であり、利益にならない戦いであるとわかっても筋を曲げず我が立場を貫いた（資料②）。この態度は、西郷の生き方とも通じる。これは、菊池一族を指導した永平六代目大智禪師の禅学を修めた

ことが家風となり、歴代の一族に引き継がれて、佛道に外れぬ政道を営んできたと言えるのではなからうか。それは、薩摩に移動した西郷一族にも受け継がれているのではないか。

十三代武重公の死、最も隆盛を誇った十五代武光公の死により、菊池氏は次第に勢いを衰えさせ、二十四代で血脈がほぼ途絶えることとなった。以後、下克上が進み、菊池氏の家督は阿蘇氏や大友氏のものとなり、遺領も老中などから奪われることとなり、二十六代義武公を最後に菊池家は断絶となった。このような状況の中、西郷家は肥後からの脱出を決意したものであったらうか。

### 五、結語・大智禪師と鳳儀山聖護寺

写真3は、菊池氏十二代と十三代が篤く信奉した鳳儀山聖護寺の法堂（本堂）である。

聖護寺は、菊池氏十三代武重公が、一三三八

年に開基された曹洞宗の禅寺である。開山は、永平道元禪師より数えて六代目の大智禪師。この方は、肥後の国宇土郡の生まれ。幼少より才気煥発。七歳にして自ら出家を希望し、長じては、宗門の長老までが畏敬するまでになった。二十六歳で元の国に渡り、様々な苦難の後帰国。晩年を加賀の祇陀寺で閑居されていた折、十二代武時公に懇願され、一三二九年、肥後に帰られ廣福寺を起こされた。更なる深山を望まれた禪師に、一三三八年、十



写真3 鳳儀山聖護寺法堂

三代武重公の釈迦山の寄進により、鳳儀山聖護寺が建立された。禅師の指導は峻烈を極め、現在も、菊池氏を教化された時の「大智仮名法語」「十二時法語」（じゅうにとときほうご）（註）が残っており、現在の禅僧たちの瞠目するところとなっているようだ。

この僧堂は、自家発電装置のみで、十年前（2008年）までは電気もガスも来ておらず、里からここまでの道は、現在でも車一台がようやく通行できるほどの細いでこぼこの一本道であり、左に切り立つ崖が迫り、右に深い崖が落ちるといふ、まことに稀有な環境にある。車同士が出合わせればどちらかがバツクせねばならない。林道の始点から車で約15分、徒歩で約30分というこの環境は、今から680年もの昔、開山の明智禅師がより山奥をと選ばれた結果であるが、武重公の時代（1330年～1340年代）には、菊

池氏一門の諸侯が、現在より更に下の麓から、道なき道を踏み、川を渡って伺候参禅し、仏祖の正法、君臣の大義を拝聴され、以後二十四代に渡って続く純忠精神の源となった（資料②）。その後、一三五八年に禅師が下山されてから護持する者がなく廃寺となり、約六百年の間、雑木が繁茂するままになっていた。

昭和十一年（1936年）、長崎市の皓台寺住職であった村上素道老師が、専門僧堂の住職の職をなげうって単身この地に入られた。ここから再興が始まるのであるが、弟子の鈴木素田老師、更に新居浜市の瑞應寺住職であった檜崎一光老師と引き継がれ、ようやく、平成二年（1991年）伽藍の体裁を整え落慶した。自然のままの不便な道場こそが、道元禅師、大智禅師の唱道する修行の場にふさわしいとして、米・豪・英・仏・独・南アメリカ諸国などからの出家僧（尼僧も）を受

けられる国際禅道場となっていた十八年間、  
電気・ガスの近代的利器を使わない、古と自  
然を尊ぶ修行が展開された。修行僧達は帰国  
後、それぞれの国で禅の指導的役割を果たさ  
れているそうである。

このような一種特別の歴史を持つ聖護寺  
と、西郷隆盛の祖先であろう菊池氏の歩みを  
振り返ることで、西郷隆盛の人となりによく  
らか説明がつくように思えるのである。今は、  
管見を述べるに留める。

了  
(エッセイスト)

\*この小文を書くにあたって、聖護寺護持会会  
長の宮本雄一様に資料の提供を頂く等、大変お世  
話になりました。記してお礼を申し上げます。

### 【資料・註】

資料①：『肥後の菊池氏』植田均著 歴史図書

社 昭和五四年刊

資料②：「聖護寺今昔(一)」国際禅道場 鳳儀山

聖護寺護持会紙「鳳山」所収

聖護寺護持会会長 宮本雄一 筆

資料③：『誰も書かなかった西郷隆盛の謎』

徳永和喜 鹿児島市立西郷南洲顕彰

館館長著 二〇一七年九月十五日

株式会社 KADOKAWA

資料④：『西郷隆盛論』堤克彦著 二〇一七年

熊本新書② 熊本出版文化会館版

註：「十二時法語」(じゅうにとときほうご)

菊池一族に対して、二十四時間切れ目  
なしの修行のあり方を、時間を追った  
具体的な実践の形で説いたもの。

## お江戸日本橋

澁谷 繁樹



ことし四月十四日午後一時、二十二人の鹿児島県人が東京は品川の商店街を歩きだした。目指すは十五キ。先の日本橋。小さい時分、学生のところ、東京にいたけれども、一日で十キも歩くなんて経験はしちやいないだろう。酔っぱらい電車賃もなくて歩くしかなかった夜を幾晩も重ねた覚えは、今も褪せてはいませんがね。

そもその話は十二年前にさかのぼる。雨だった平成十八年の四月二日、鹿児島市の西田橋のたもとに薩摩街道保存会のメンメンが集合した。保存会は江戸時代の参勤交代の道を歩いてみようじゃないか、廃れた道なら探

しだして守ろうじゃないかを合言葉に結成された。江戸まで千五百キ、川のほとりの公園で、トイレの庇を借りて雨を避けながら、昔の人はよくもまあ歩いたもんだと感心しきりだったのを覚えている。

江戸の薩摩人がどれだけ健脚だったか、一八一九（文政二）年の記録を見てみよう。

出発は八月五日・伊集院泊、六日・湯田泊、七日・阿久根泊、八日・米ノ津泊、九日・佐敷泊、十日・日奈久泊、十一日・川尻泊、十二日・山鹿泊、十三日・拜犬塚泊、十四日・山家泊、十五日・木尾之瀬泊、十六日・小倉泊、十七日・乗船、十八日・下関港泊、十九日・出船。

九州四百キを二週間もかからずに踏破している。道中足袋に草鞋で一日にはぼ四十キ。一度、数寄人が装束も往時のまま挑戦してみただけでも一キも歩けなかった。健脚は足の

裏が厚くて達者でない」と成立しない。

二十日・新泊り港泊、二十一日・上之関泊、  
二十二日・湯之こ泊、二十三日・ういの津泊、  
二十四日・小湊泊、二十五日・岩木泊、二十  
六日・ひびの港泊、二十七日・むろの港泊、  
二十八日・明石泊、二十九日・兵庫泊。

旧暦は九月に入る。一日・兵庫泊、二日・  
船中、三日・大阪泊、四日・大阪泊、五日・  
草津泊、六日・大山泊、七日・四日市泊、八  
日・佐屋泊、九日・鯉鮒之町泊、十日・二川  
泊、十一日・見府之町泊、十二日・大井川泊、  
十三日・府中之町泊、十四日・由比泊、十五  
日・由比泊、十六日・三島泊、十七日・小田  
原泊、十八日・戸塚泊、十九日・江戸到着。  
船足も入るとはいえ、基本は徒歩、四十日  
とちよつとで江戸は白金の薩摩藩下屋敷に入  
っている。現在で言うところ、東京都港区白金台

一丁目、白金小学校あたりの約八千坪。

記録（道之記）を残してくれた薩摩藩高城  
郷湯田村生まれの医者・桐原種徳は「早くも  
白金の南の御門に着いた。君（島津重豪）は  
御籠から地面におみ足をおろし御門をお通り  
になる。うれしいつたらないじゃないか。万  
歳、万歳だ」と喜んでいる。

桐原さんは出発日の八月五日に書いている。  
「水上坂下の茶屋で休足（休息ではなくて休  
足。足を休ませる感じがよく出ているな）。親  
類からご馳走をふるまわれて再び出立。にわ  
かに雨が降り出した」。

保存会の門出の日も雨だった。江戸人には  
比べるべくもない足弱の現代人が、同じ雨の  
日に歩き出して、はるばる江戸は日本橋まで  
どうやってたどり着いたか。それはね。ちよ  
うどお時間となりました。またの機会に譲り  
ましょう。

（元新聞記者、薩摩街道保存会顧問）



江戸時代の橋です 日本橋も同じ作りだったでしょう (江戸東京博物館)



大名屋敷の一つ 落語「井戸の茶碗」で高木作左衛門がゴミ屋さんに声をかけるのが堀に見えている御窓 道は御窓下になります (江戸東京博物館)



大名籠 見た目重視で乗り心地の方はねえ (江戸東京博物館)



ご存知の二八そば屋台 担ぐとズシリと来る重さです (江戸東京博物館)

## 明治六年の政変と西南戦争

### ―近代日本の分岐点と西郷隆盛



梶原 宣俊

#### 一、はじめに

明治維新一五〇周年を迎え、NHKの大河ドラマ「西郷どん」も始まり、鹿児島は盛り上がりを見せている。観光や経済活性化につながることも大事だが、あまりにも商業主義的な「西郷どんブーム」には多少首をかき上げたくなる。むしろ、これを機会に明治維新や西郷隆盛の近代日本における歴史の意味について、現代の視点から考え、教訓を引き出すことも大事であると思う。特に、明治維新と日本の近代化の歴史を美化するだけでなく、

また教科書的理解を超えて、その光と影を冷静に分析すべきチャンスではなかるうか。

明治維新は、二六〇年も続いた江戸徳川幕府を崩壊させた大革命であった。黒船来航を契機に、徳川幕府・武士を頂点とする支配構造を変革するために、地方の下級武士たちが朝廷を巻き込んで起こしたクーデターであった、一八六七年、大政奉還が上表され、王政復古の号令が出された。その後、鳥羽伏見の戦いで戊辰戦争が始まり、多くの犠牲者を出したが、江戸城無血開城により「無血革命」のイメージが定着した。

鈴木莊一は『政府に尋問の筋これあり・西郷隆盛の誤算』（二〇一八毎日ワンス）で、「明治維新は市民革命である。イギリス名誉革命（一八六八）、アメリカ独立宣言（一七七六）、フランス革命（一七八九）に次ぎ、ロシア革命（一九一七）に先立つ、世界史上第4番目

の市民革命である」と述べている。私も以前からそう考えてきた。したがって私は、なぜ「明治維新」と名付け「明治（市民）革命」と名付けなかったかと長い疑問に思ってきた。今回初めて、「維新」という言葉が水戸学から出てきたことを知った。もし、明治市民革命という言葉を使っていたら国民の意識は相当変わったのではなからうか。革命という言葉を使わずに「維新」という言葉を使った点に、日本人らしい感性と政府、支配者の思いが潜在しているように思われる。しかも、この革命は明治初期にその後の国家ビジョンを巡って大きな分岐点を迎えた。それが、「明治六年の政変」であり「西南戦争」であったと私は考えている。

私は、学生時代から、自分が生まれる一年前まで続いた戦争に関心を持ちささやかながら、近現代史の勉強をしてきた。特に、第二

次世界大戦、日本の大東亜戦争（太平洋戦争）の歴史について学びながら、この悲惨な大戦争の原点は、明治新政府の急速な近代化（欧米化）、および天皇を中心とする絶対主義、有司専制（特定の藩閥政治）による官僚制国家にあるのではないかと考えてきた。そして、最近はその明確な分岐点が「明治六年の政変」と「西南戦争」ではなかったかと考えるに至った。さらに西南戦争は、明治維新後の第二の革命戦争ではなかったかと考えるようになった。

つまり、私は明治維新後の十年間、とりわけ明治六年の政変が、近代日本の在り方を大きく左右する重要な分岐点ではなかったかと考えている。幕末から明治維新までの歴史がドラマ等で注目されがちだが、明治新政府（大久保・岩倉・木戸たち）がいかに日本の近代化を推し進めようとしたのか、そして、その

過程で明治維新の立役者、西郷隆盛をはじめ、後藤象二郎、江藤新平、板垣退助、大隈重信たちがいかに考え行動してきたかを、西南戦争一四〇周年をも視野に入れ、明治元年から「明治六年の政変」そして「西南戦争」に至るまでの十年の歴史を検証してみたい。

## 二、明治十年間の歩み

まず明治十年間の歴史を西郷との関連で概観しておこう。

一八六七年（慶応三年）

一〇月一日 大政奉還

二月九日 王政復古の大号令・小御所会議

二月二十五日 江戸薩摩藩邸焼き討ち

一八六八年（慶応四年）（明治元年）

一月三日 鳥羽伏見の戦い・戊辰戦争

三月一日 五箇条の御誓文発布

三月十五日 西郷隆盛、勝海舟と会談

四月一日 江戸城無血開城

六月五日 西郷京都に上り北越戦線に備える

ため鹿兒島に帰る

七月一日 江戸が東京となる

八月二七日 明治天皇即位の大礼

九月八日 明治に改元・一世一元の制

九月三日 会津藩 降伏

九月二六日 庄内藩 恭順

九月二七日 西郷 庄内藩に寛大な処置

一〇月三日 天皇 東京に遷御

一〇月二三日 西郷 後事を小松・大久保に

託し鹿兒島に帰る

一〇月二八日 新政府 藩治職制を定め各藩に

執政・参政・公儀人を置く

一八六九年（明治二年）

一月一日 西郷朝廷より召されるも固辞

二月 久光 西郷に親書を送り藩政改革

の意見、藩政参画を打診するも動かず

二月二五日 藩主忠義 日当山温泉に出向き

西郷に藩政参与を要請

二月二六日 西郷 鹿兒島に帰り、藩の参政

一代寄合に就任、私領制度を廃止し常備軍を編成

五月一日 西郷 函館戦争の援軍を率いて

鹿児島を出航二五日に着くがすでに戦争

は終了

五月二一日 函館戦争

五月二八日 五稜郭開城、榎本、大鳥降伏

戦争終了

六月二日 西郷に武人としては最高の禄永世

千石賜る

九月二六日 西郷 正三位に叙せられるも辞退

一八七〇年(明治三年)

一月二八日 西郷 藩参政を辞退するも相談

役を命ぜられる

七月三日 西郷 鹿児島藩大参事となる

七月二七日 横山正太郎(薩摩藩士) 維新の

大義を忘れ私利に走る時勢を慨嘆、衆議

院に諫書を投じて自刃、西郷その心情に

深く同情

十一月七日 旧庄内藩主酒井忠篤ら九三名西

郷を訪問

一二月 勅使岩倉具視、大久保利通来鹿、

新政府出仕の勅命を伝える。西郷、

郡県制や親兵制を提案

一八七二年(明治四年)

一月三日 西郷 鹿児島を出航、山口で毛利

父子、高知で板垣と会談 薩長土連合を

説く

六月二六日 大久保の説得で木戸とともに参

議に就任、軍制改革や警察制度の確立に

尽力

七月一四日 廃藩置県の大詔を渙発 板垣・

大隈参議となる

一〇月二〇日 条約改正を目的に岩倉、木戸、

大久保ら欧米使節団派遣を決定

一月二二日 横浜を出航、留守政府西郷に

一任

一八七二年(明治五年)

五月三日 西郷 天皇の西国巡幸に同行

七月二〇日 西郷 参議兼陸軍元帥

八月二日 学制発布

十一月二八日 徴兵令発布

一八七三年(明治六年)

四月一九日 後藤象二郎、大木、江藤新平参議

となる

五月一〇日 西郷陸軍大将兼参議となる

五月二六日 大久保欧州より帰朝(七月には

木戸九月には岩倉帰朝)

六月二二日 朝鮮問題が初めて閣議にかかる

八月三日 閣議で朝鮮使節派遣問題を討議、

西郷意見書提出

八月二七日 閣議で朝鮮に西郷を使節として

派遣することが決まる

八月一九日 太政大臣三条 天皇に朝鮮への

使節派遣を奏上 内諾を得る

一〇月一四日 大久保ら閣議で朝鮮への使節

派遣を問題視、西郷と対立

一〇月一八日 三条 精神錯乱に陥る

一〇月二〇日 岩倉 太政大臣職に就く

一〇月三日 閣議で岩倉は朝鮮使節派遣の議

を覆す、西郷抗議し直ちに辞表提出

一〇月二四日 岩倉 天皇に奏上し朝鮮問題

を無期延期、板垣、後藤、江藤、副島の四参議も辞任

一〇月二八日 西郷横浜から乗船し十一月

十日鹿児島へ

一八七四年(明治七年)

一月一四日 岩倉 高知県土族に襲撃される

一月一八日 板垣・後藤・江藤・副島ら民選

議員の設立を建白する

二月一日 佐賀の乱(江藤新平)

三月一日 西郷 鰻温泉にて江藤新平と会う

六月 西郷 私学校、吉野開墾社創設

一八七五年(明治八年)

五月 三条実美 西郷の上京を促すが応ぜず

九月二〇日 江華島事件

十二月 西郷 売春禁止案文を書き大山県令に

建言

一八七六年(明治九年)

二月二六日 朝鮮修好条約

三月一日 島津久光の家令が上京して政府を

弾劾するよう促すが西郷辞退

一〇月二四日 神風連の乱

一〇月二八日 萩の乱

一八七七年（明治一〇年）

一月二一日 政府の密偵中原尚雄、暗殺指令を

帯び鹿児島に潜入

一月三〇日 私学校生徒 陸軍省の火薬庫を

襲撃

二月一七日 西郷 桐野・村田らを率い鹿児島

を進発

二月二二日 西郷軍熊本城を総攻撃

三月三日 田原坂の激戦

四月一五日 西郷軍 退却

八月一七日 西郷 全軍に対し「この上の進退

は各人の自由に任せる」と布告

九月一日 鹿児島、城山にこもる、九月二四日

政府軍総攻撃、城山陥落、西郷 自決

### 三、明治六年の政変と征韓論（遣韓論）の本質

こうして十年間の歩みを振り返ってみると目まぐるしい変化のなかで西郷隆盛がさらに重要な役割を果たしていることがわかる。

一八六八年九月、慶応から明治に改元、翌年大久保の提案により京都、大阪ではなく東京遷都が行われ、二官八省制度がスタートした。西郷は五月の上野戦争後、藩主とともに鹿児島に帰国、八月山形庄内藩に寛大な処置をして、十月二三日、後事を小松・大久保に託して京都を発ち十一月には鹿児島に戻っている。「自分の役割は終わった」として、悠々自適の生活にはいった。それから約二年間、西郷は新政府から距離を置いていた。つまり、明治四年に東京に行くまでの二年間、明治政府の創業期には西郷は不在であった。西郷はなぜ、明治維新の中心人物でありながら、新

政府に残らなかつたのだろうか。革命、クーデターの大將は勝利すれば新政権のリーダーになるのは世界の常である。「自分の役割は終わった」と潔く身を引いた西郷の心境は、私のような凡人には理解不可能である。私の推測では、西郷は革命に全身全霊をささげ八面六臂の活躍をしてかなり疲れていたのではなからうか。名誉欲のない西郷は少し休みたいというのが本音だったかもしれない。あるいは、大久保や長州藩が、新政府の主導権を巡って醜い権謀術数をめぐらし始めていることに嫌気がさしていたのかもしれない。

翌明治二年一月、西郷は、朝廷より召されるも固辞する。二月、薩摩藩主忠義の要請により参政一代寄合に就任、私領制度を廃止し、鹿児島旧封建藩政改革に尽力し、地租改正や、門閥、上級士族の土地を減少させ、一般士族の生活改善に尽力した。明治三年、鹿児島

島藩大参事となるが、岩倉・大久保来鹿し、新政府出仕の勅命を伝える。そして明治四年、遂に新政府の中心として動き始める。懇願されて参議として政府に戻った西郷は「廢藩置県」に尽力した。これは、大きな革命で、西郷なしでは断行できなかったと思われる。そして、岩倉・大久保・木戸・伊藤たちは欧米視察に出発する。この大事な時期に政府の中心人物が、多額な金を使って欧米に行ったことが信じられない。さらに、私はなぜ西郷と一緒に欧米視察に行かなかったのか、疑問に思う。岩倉、大久保らはなぜ、西郷だけを残したのだろうか。西郷は、すでに世界の事情に詳しくあえて今、欧米視察に行く必然性を感じていなかった可能性もある。あるいは大久保らは、留守政府を任せられるのは西郷しかないかと考えていたのかもしれない。しかし、その西郷がおとなしくしているわけがな

い。

留守政府首班は西郷を頭に、大隈・江藤・板垣らであった。この留守政府がそのまま新政府になっていけば、近代日本は大きく変わったのではなからうか。この時、誓約書が取り交わされ、留守中は、対外、国内の重要決定は行わないと書かれていた。西郷の独断専行を恐れていたのである。しかし、この一年半は、西郷が実質的最高責任者であったから、誓約書にもかかわらず、土地永代売買禁止の解除、海軍省・陸軍省、鎮台の設置、教部省の設置等を実施した。さらに、別府晋介を朝鮮に派遣し、開国の交渉にあたらせた。西郷は、明治五年参議兼陸軍元帥となり、八月二日には学制発布、一月二八日には徴兵令を發布する。明治六年には後藤象二郎、大木、江藤新平が参議となる。

五月二六日、大久保欧州より帰朝（七月に

は木戸、九月には岩倉帰朝）、彼らは、留守中の西郷のリーダーシップ、大胆な改革実績に唾然とする。

六月二日、朝鮮問題が初めて閣議にかかった。八月三日、閣議で朝鮮使節派遣問題を討議、西郷は意見書を提出し、八月一七日閣議において、西郷を朝鮮に派遣することが決定された。

八月一九日、太政大臣三条が天皇に朝鮮への使節派遣を奏上、内諾を得る。ところがここで、一〇月一四日、大久保らが閣議で朝鮮への使節派遣を問題視、西郷と対立する。ここから伊藤・大久保・岩倉らが結束し、三条実美に圧力をかけ、西郷派遣を中止させる。

三条は精神錯乱に陥る。二度も閣議決定されたものを覆され、西郷は激怒し、参議を辞任、江藤・大隈・板垣らも辞任し、鹿児島出身の軍人もまた一斉に鹿児島に帰国した。

これが「明治六年の政変」と呼ばれ、征韓論（遣韓論）論争として有名になるものである。そしてこの政変が、やがて西南戦争へとつながるのである。この朝鮮との友好の可能性を秘めていた西郷の命がけの使節派遣を伊藤・大久保・岩倉らはなぜ反対したのか。

表向きは、「今は外交よりも内政が大事」という理由になっているが、結局、新政府は翌明治七年には、宮古島島民遭難事件を発端に初の海外出兵となる台湾出兵を行い、明治八年には李氏朝鮮に対して軍艦を派遣し江華島事件の末、日朝修好条規を締結している。

西郷の使節派遣が予定通り行われていたらその後の朝鮮関係は変わっていたかもしれない。大久保・岩倉らは、むしろ西郷の大胆不敵なリーダーシップ、主導権に恐れをなした自分たちの存在感を示すために、強引に反対したのではなからうか。いずれにしても、こ

の「明治六年の政変」こそ、近代日本の運命を左右する重大事件であった。

「征韓論」という言葉は政府側が後からつけたものであり、西郷の考えはあくまで朝鮮と友好的外交関係を結ぶことが目的であり「遣韓論」というべきものである。この辺の事情の背景については勇知之が「真説 西南戦争」（七草社二〇〇七）で詳しく論じている。

勇知之は、この「征韓論（遣韓論）」対立の背景に、長州藩の汚職問題があったことを指摘している。司法卿江藤新平が追及していたこの問題に危機感を抱いた伊藤博文が、征韓論（遣韓論）に反対することにより主導権を握り、追及を免れようとしたというものである。伊藤博文の本質を象徴する逸話である。

同様に、毛利敏彦は征韓論の通説に異議を唱え、政変の原因は征韓論ではなく、大久保・長州派と江藤新平との対立であり、政局の主

導権をめぐる権力闘争であったと論じている。したがって、これは征韓論政変ではなく「明治六年政変」と呼ぶべきであると主張している。『明治六年政変』中公新書、一九七九年。全く同感である。さらに私は、この政変は近代日本の在り方をめぐる重要な分岐点でもあったと考えている。

勇知之は、朝鮮問題、征韓論（遣韓論）の本質を、近代日本国の基本方針の違いとその主導権争いにあつたと指摘している。欧米視察団はフランスとドイツの現状を視察し、ゆるやかな近代化と市民革命のフランスより、ドイツ型の立憲君主国家、官僚主導型中央集権国家、急速な近代化路線を選んだ。その違いを下に示すようにわかりやすく表にしている。西郷は、欧米視察はしなかったが、明らかにフランス型の政治、未来ビジョンを有していたと考えられる。

<p>大久保（明治政府） 対西郷のめざした政治・ビジョン</p>	<p>ドイツ型立憲君主国家</p>	<p>官僚主導政府 急速な近代化 中央集権国家</p>	<p>有司専制 大きな政府 軍事大国 欧米化策 資本主義の土地政策私有 文明開化の推進 政府高官と資本の癒着 帝国主義的外交 アジアの侵略</p>
<p>フランス型民主主義国家</p>	<p>議会重視 ゆるやかな近代化 地方分権 地方の文化を認める</p>	<p>人民に威を張らず圧せず 小さな政府 兵農一致 日本の心（精神）優先 土地共同所有 文明に惑わされない 節儉、清貧な政府 道義的外交</p>	<p>アジア諸国の連合</p>



征韓議論図（明治10年、鈴木年基作）

前述した鈴木莊一は、「岩倉使節団は、条約改正について何ら成果もなく、ただ二年間漫然と欧米見物を楽しんだだけだった。帰国した岩倉らは、自分たちの留守中に、西郷らがイギリス・フランス・アメリカを手本とした開明的・民主的な国造りに成功を収めていることに唾然とした。」と述べている。そして「彼ら外遊組の西郷、江藤、大隈、板垣ら留守組に対する嫉妬こそ、明治六年政変を招く火種となった」と指摘している。

さらに、勇知之と同様に『イギリス・フランス・アメリカを手本に開明的・民主的な国造りを進める西郷留守政府に対して「天皇を中心とするドイツ型君主制・官僚独裁の国造り」をするしかなかった』と断じている。

そして、「ドイツ式に統帥権を独立させた憲法こそが、太平洋戦争へと突っ走る布石」となったと指摘している。

結局、西郷はじめ江藤・大隈・板垣らは、明治新政府のドイツ型立憲主義国家をめざす姿勢と思想に反対し、大久保たちの策略によって、野に下ったのである。朝鮮問題はその氷山の一角ではなかったのか。もし、日本が西郷たちのフランス型民主主義国家をめざしていれば、日本の近代化、近代史は大きく変わっていたに違いない。その意味で、「明治六年の政変」は大きな転換期であったと言える。

この政変の影響は、その後、一八七四（明治七年）に佐賀の乱（江藤新平）、一八七六年（明治九年）には、神風連の乱・秋月の乱・萩の乱が起り、最終的には一八七七年（明治十年）の西南戦争へと続くことになる。これらの反乱もまた反政府運動デモであったというべきである。

歴史は常に勝者、支配者によって作られる

が、明治六年の政変から西南戦争にいたるまでの四年間は、近代日本の将来を左右する重要な分岐点として教科書でもしっかりと教えるべきではなからうか。

これらの反乱は、下級武士の不平不満が根底にあったとはいえ、明治新政府のドイツ型立憲君主国家思想に反対し、フランス型民主主義国家構想を支持する反政府運動だったのではないか。特に西南戦争は、私学校生の暴走があったにせよ、西郷が「政府に尋問のかわりどこれあり」と述べたように、必ずしも戦争を意図していたわけではない。武装した反政府デモのようなものであった。戦争に持ち込んだのは、むしろ政府側であった。

明治維新に貢献した最大の英雄西郷隆盛が総大将であるから、政府はその意見を聞く心の広さがあれば戦争にはならなかったのではなからうか。

新政府は、長州閥の腐敗汚職の隠ぺいや主導権争いのなかで、ドイツ型立憲君主国家実現を焦るあまり、西郷を「征韓論」の戦争志向のイメージを作り上げ失脚させたのではなからうか。もともと、岩倉・大久保・伊藤は、幕末からの陰謀組であり、私心なき高潔な西郷とは比較にならない官僚政治家であった。この明治新政府の伝統は現在の政府まで続いていると言っている。

新政府は反政府運動を恐れ、そして西郷を恐れ、話し合いではなく武力によって弾圧する道を選んだ。そして、西郷は新政府軍に敗北し、潔く自刃した。この反政府運動に過剰に反応し、弾圧する姿勢は、急速な近代化とドイツ型立憲君主国家をめざす政府として、その後明治大正昭和にかけてますます強化されていくことになる。そして、その後の自由民権運動、大正デモクラシーを弾圧し、大東

亜戦争につながっていったのではなからうか。歴史にイフはないというが、イフを考えるのが歴史を学ぶ醍醐味である。もし、大久保新政府が盟友西郷の意見を謙虚に聴き、ドイツ型ではなくフランス型を導入していれば、西郷の自死もなく、西南戦争の多くの犠牲者もなく、日本の近代化は変容していたであろう。議会重視によるゆるやかな近代化となり、地方分権 地方の文化を認め、人民に威を張らず庄せず、小さな政府として兵農一致を進め、日本の伝統、心（精神）を優先し、西洋文明に惑わされない節儉、清貧な政府として、道義的外交によるアジア諸国の連合の可能性もあつたのではなからうか。そうすれば、集会条例（明治十三年）による自由民権運動の弾圧もなく、大東亜戦争にいたる天皇絶対主義や官僚と結託した軍国主義も悲惨な大敗北もなかったかもしれない。

西南戦争の敗北と西郷隆盛の死は、フランス型の民主的なもう一つの日本近代化の道の敗北でもあった。この論点は、今回取り上げた識者だけでなく、多くの心ある人々によって支持されている。

入来院重朝氏も、明治新政府の方針が大東亜戦争につながったことを指摘し、原田伊織の『明治維新という過ち』に共感している。

同じく宮下氏（天台宗大雄山南泉院住職）も明治六年の政変を、欧米列強に対峙する外交政策の路線闘争であり、文明観の対立であり、大東亜戦争敗北までの七十年間の分水嶺であったと指摘している。（『炉ばたセイ談』十三号平成二十九年）

私は、明治新政府の最大の過ちは、近代化を急ぐあまり、過去の貴重な歴史伝統文化精神を軽視または禁止したところにあると考えている。その代表的なものは、和服を軽視し、

学校教育で邦楽を排除し、神道による天皇絶対主義を構築するため、廃仏毀釈を実施したことである。さらに、その急速な近代化が、福沢諭吉が提唱した「和魂洋才」ではなく、「洋魂洋才」になってしまったことである。「和魂」は、天皇絶対主義に収れんされ、世界に類例のない悲惨な大東亜戦争へとつながった。

そして、敗戦後は米国の支配、影響により、ついに日本人は一五〇年かけて完全に「洋魂洋才」になってしまったのではないか。

戦後日本は米国流の文化や民主主義を押し付けられ、日本の伝統的精神文化を忘れてしまった。米国の長所である自由と民主主義も、形式的に受け入れたが、国民に根付いたとは言えない。国民の力で勝ち取ったものではないから真の民主主義国家とはなっていない。私はこれまで、広島、福山、福岡、鹿児島

島で地域活性化のために行政と連携しながら様々な活動を経験してきたが、国民、市民が主人公であると心から実感したことはない。きわめて形式的民主主義なのだ。日本、および日本人が真の民主主義の精神を体得するにはまだまだ時間がかかるというのが実感である。

その意味で、市民革命である明治維新、そして第二の革命を目指した「明治六年の政変と西南戦争」及び明治から大正、昭和初期までの自由民権運動や大正デモクラシーの歴史を学び、検証することが大事ではなからうか。

#### 四、西南戦争と自由民権運動

そこで最後に、自由民権運動と西南戦争の関連について触れておきたい。

「明治六年の政変」後、西南戦争に至る過程は次のようなものである。

明治六年十一月、内務省が設立され、内務



官軍と西郷軍の激突を描いた浮世絵

卿に大久保が就任、政府の主導権を握ることになる。これにより内務省主導の官僚制が確立し、太平洋戦争の敗北まで続くことになる。明治七年、一月板垣・後藤・江藤・副島ら民選議員の設立を建白、二月佐賀の乱（江藤）が起きる。四月台湾出兵、明治八年元老院、大審院設置。明治八年三条実美が、西郷の上京を促すが固辞。明治九年一〇月、神風連の乱、秋月の乱、萩の乱（前原一誠）が起きる。これらの反乱もまた下級武士の新政府に対する抗議行動であった。

明治十年一月二一日政府の密偵中原尚雄が、暗殺指令を帯び鹿児島に潜入、一月三〇日私学校生徒陸軍省の火薬庫を襲撃、二月大山県令を私学校に招き、東上すると告げる。西郷、桐野・村田らを率い鹿児島を進発、熊本城を包囲、総攻撃。田原坂の激戦に敗北、八月城山に逃れる。九月政府軍の総攻撃によ

り陥落、西郷自決し、西南の役が終了することになる。西南戦争の敗北は、西郷の考えるより民主的な新しい近代日本の在り方の敗北でもあった。

私は、各地の反乱も西南戦争も明治新政府の方針、急速な近代化路線や有司専制に対する抗議行動であり、第二の明治維新をめざしたクーデターではなかったかと考えている。そして、その中心人物が西郷隆盛であり、天皇を中心とする近代統一国家とともに下級武士や庶民の立場に立った真の民主的革命家として新政府に抗議しようとしたのが、西南戦争であったと考えている。

「政府に尋問の筋これあり」という言葉がこの戦争の真意を象徴している。西郷は戦争も辞せずという覚悟はあったが、あくまでも政府と話し合うつもりであった。その証拠が、海路ではなく陸路での進軍であったことであ

る。つまり、これは武装した下級武士たちによる反政府デモ行進であった。しかし、大久保を中心とする新政府は全く聞く耳をもたず、西郷の実力や反乱を恐れ、実力行使に出たのである。つまり戦争にしたのは政府側であった。西郷は、私学校生に命を預け、海路ではなく陸路から進軍し地方の共感を得ようとしたのではないか。しかし、その思惑は外れ、熊本城で敗北し、田原坂の激戦の後、城山にこもり、ついに自刃した。

この十年間の西郷の行動とその後の近代日本の歩みに関する研究は、いまだ、十分に解明されていないように思える。

特に、その後の大正デモクラシーへと続く自由民権運動と西南戦争との関連については極めて不十分である。

西南戦争と自由民権運動の関係についてはこれまで論じられることが少なかったが、

小川原正道は「西南戦争と自由民権」（慶応義塾大学出版会、二〇一七）で、西南戦争と自由民権運動の関係について詳細に分析している。特に、鹿児島における自由民権運動研究の不十分さを指摘しながら、鹿児島の動きについて詳しく論じている。

小川原は、西南戦争前後の民権家として、鹿児島の田中直哉と柏田盛文を取り上げている。田中は、西南戦争前は評論新聞記者として政府を攻撃し、開戦直前に鹿児島に帰郷、私学校徒の鎮撫・啓蒙に努め、真宗の解禁を通して権利・義務の観念を理解させようとしたが、結局西郷暗殺計画の容疑者として逮捕され、戦後は鹿児島県会議員、九州改進黨鹿児島県部の幹部となった人物である。

柏田は、慶応義塾卒業後すぐに田中とともに帰郷し、やはり私学校生を鎮撫し、逮捕され、のちに鹿児島県会議長や自由党幹事、衆

議院議員などを務めた人物である。柏田盛文については、奇しくも前号で触れた入来院貞子が詳しく論じているが、もっと注目されるべきであろう。『千台』三二号平成十六年）

そして、小川原は、西南戦争は自由民権家にとって、光と影の二つの側面を持っていたと指摘している。

民権家は、西南戦争に、明治新政府を現実  
に打倒しうる可能性と、理想実現の機会を夢  
見た。光の部分である。一方、私学校党は民  
権論を理解しない守旧派に属する人々であつ  
た。影の部分である。光の部分に運命を託し  
た存在が熊本協同体、中津隊といった薩軍に  
参戦した民権党であつたと指摘している。私  
は、この西南戦争の光の部分をもっと研究し  
明らかにすべきだと思う。そして、その後の  
自由民権運動や大正デモクラシーにどう引き  
継がれ、どのように弾圧され、戦争体制へと

突入したかを、現代の教訓として学ぶことが  
大切ではないかと思う

## 五、終わりに

これまで「明治六年の政変と西南戦争」に  
ついて、近代日本の分岐点という視点から述  
べてきたが、この事實は、もっと注目される  
べきであり、教科書でも大きく取り上げるべ  
きではなからうか。明治維新一五〇周年を迎  
え、その真実の歴史を、国民の立場から考え  
明らかにする作業はいまだ不十分と言わねば  
ならない。

現在、日本は激変する世界の中で路頭に迷  
っている気がする。政府は相変わらず権力に  
しがみつき、官僚支配は問題を内包しながら  
不死鳥のように生き残っている。歴史の潮流  
は、底の方で脈々と現在まで流れているのだ。

自由民権運動は、現代・未来につながる重  
要な理念・思想であり、現在においても自由

と民主主義の思想が国民に根付いているとは言い難い。戦後、米国によって与えられた民主主義は極めて形式的であり、国民に血肉化されているとは言いがたい。戦後政府もまた安保闘争はじめ多くの民衆、学生の反政府デモを武力で弾圧してきた。

現代を生きる私たちは、この歴史を教訓として二度と同じ過ちを繰り返さないよう、現在の政治家、官僚の在り方をしっかりと監視しなければならない。

「永続敗戦論」で有名になった白井聡は近著「国体論 菊と星条旗」（二〇一七集英社）で、「国体」というキー概念を駆使し、近現代史を見事に分析している。近代日本の前半に作り出され、封建社会だった日本を少なくとも外見的には列強に伍する近代国家へと成長させた装置が「国体」であったと分析し、それは進路を誤り、一九四五年に一度破滅し、

現在、華々しい経済成長のあと二度目の破滅に向かってしていると指摘している。

過去の歴史を学ぶことは、現在をより深く理解し、未来を創造するために必要不可欠な課題である。次回は「国体論」を巡って、私なりの近現代史論を、七〇年の戦後体験を踏まえながら書いてみたい。

（癒しと学びと語らいの里・ハーブガーデン花びあ（民宿・カフェ）代表、個人と地域のキャリア開発を支援する国際キャリア研究所（所長）

### 【参考文献】

・「明治維新の正体」鈴木莊一（毎日ワングズ 二〇一七）

・「政府に尋問の筋これあり・西郷隆盛の誤算」鈴木莊一（毎日ワングズ

二〇一八）

- ・「真説 西南戦争」勇 知之（七草社 二〇〇七年）
- ・「幕末戊辰西南戦争」学習研究社 二〇〇六
- ・「西郷隆盛―孤高の英雄全軌跡」新人物 往来社二〇〇八
- ・「明治六年政変」毛利敏彦 中公新書 一九七九
- ・「私の西郷研究」安田耕作ほか 盈進社 二〇一二
- ・「西郷隆盛 維新一五〇年目の真実」 家近良樹 NHK出版 二〇一七
- ・「西郷南洲翁略年表」阿多俊彦編 二〇一八
- ・「西郷隆盛―西南戦争への道」猪飼隆明 岩波書店 一九九二
- ・「西南戦争と自由民権」小川原正道 慶応義塾大学出版会 二〇一七
- ・「明治維新という過ち」原田伊織 毎日ワンス 二〇一五
- ・「大西郷という虚像」原田伊織 悟空出版 二〇一六
- ・「虚像の西郷隆盛 虚構の明治一五〇年」 原田伊織二〇一八講談社
- ・「永続敗戦論」白井 聡
- ・「国体論 菊と星条旗」白井 聡 集英社親書 二〇一八
- ・「まぼろしの維新 西郷隆盛、最期の十年」津本陽 集英社 二〇一八
- ・「西郷隆盛の冤罪 明治維新の大誤解」 古川愛哲 講談社二〇一七
- ・「素顔の西郷隆盛」磯田道史 二〇一八 新潮社

## 雨嫌いのひとり言



入来院 久子

東京は梅雨が明けたとニュースで知った。雨が嫌いな私は東京が羨ましい。鹿児島はまだグズグズと雨が降る天気予報だ。しかも昨年より23日も早い梅雨入りだったそうだから嫌になる。実は、私が東京から実家に戻ったのは昨年の十二月半ばだ。だからもうすでに鹿児島での生活は（現在六月三十日）半年が過ぎたことになるが鹿児島で迎える初めての梅雨だ。鹿児島の雨量はたぶん東京の比ではないだろうと用心はしているのだが、さて今年の梅雨はどれだけ降るのだろうか。

雨が嫌いな理由は20年ほど前、当時住んでいた香川で珍しく降った大雨の晩に交通事故

に遭って死にかけてからだ。対向車が豪雨の中突っ込んできて、正面からぶつけられた車はもちろん廃車。私は肺挫傷と胸骨骨折で救急車に運ばれ大学の付属病院の集中治療室行きとなった。次男の剣道の練習の送迎時のごとで、助手席の次男は奇跡的にシートベルトの青痣だけですんだのだが、運転していた私は当時エアバッグの無い軽自動車だったので、ハンドルに胸を強打しての大怪我だった。

晩の事故だったのだがその夜中に鹿児島の実家に姑が電話して母の貞子が翌朝一番の飛行機で香川の治療室まで駆け付けてくれた。翌日から夫は中学校の教諭、姑は舅と自営の電気店で自分の仕事を普段通りにこなしていたため、病院にはほとんど来なかった。一週間ほど集中治療室で付き添ってくれた母だった。

事故直後病院に駆け付けた姑は私が集中

治療室のベッドであえいでいる際「肺がつぶれていて専門医が不在のためレントゲン写真だけではよく分からないが、肺にもし穴が開いていたら今夜危ない。」と医師から告げられたにもかかわらず、看護師に「ここは完全看護でしょ？ 何かあったら連絡してください。明日仕事があるから帰りましょう。」と夫と息子たちを促したのだ。信じられないことに夫はそれに従って、肺がつぶれて息がなかなか出来ずに苦しむ私を残してその晩さっさと家族を連れて家に帰ってしまった。実はベッドで酸素マスクを付けられていた私は怪我の痛みで気を失うことなく、姑や夫の会話をしっかり耳にしていた。たぶん、姑たちは私の意識が無いと高をくくくつての言動だったのだろう。

もし肺に穴が空いていたら私は死ぬのに、死んだ後に病院へ駆け付けるつもりなのかと

私は悶えながら夫に聞いたかった。しかしながら苦しくて言葉にならなかったのだ。鹿児島の母には「娘さんが危篤なので早く来てー」と真夜中に電話しながら、私に付き添うことなく帰宅してしまった姑や夫。それでも私はその事実を知っていたことを十年以上、家族に黙っていた。ただひたすらずっと、ずっと心の奥で夫と姑を許せずにそれからの時間を過ごしていたのだ。

そうそう、私のことを母に”娘さん“と言ったが、姑は漢字こそ違うが読み方は私と同じヒサコという名前。だから嫌だったのか、嫁に来た私を一度も「久子さん」とは呼ばなかったし、それは夫も同じで私が子供を産んで母になる以前まで私は姑や夫から「ちよつとアンタ」や「おい！」と呼ばれていた。母親になってからは本意ながらも彼らからは「お母さん」と私は呼ばれたのだ。

一事が万事で、その他にも様々に心傷つくことが多々あり、その都度耐えに耐えてきたのだが、積もり積もって限界が来て、一昨年私は思い切って独り身となり旧姓の入院院に戻った。そして香川から古巣の東京に帰り、大学時代の友達や後輩のサポートで私は東京で仕事をする事ができたのだ。

それにしても香川での交通事故後、肺や胸の骨が完治しても一年間むち打ち症に苦しんだ私は、未だに雨が降る前に頭痛と肩こりが酷くなる。天気予報を聞かなくても翌日の雨が分かるほどだ。だから雨は大嫌い。

その雨嫌いな私が僅か一年足らずの東京生活で鹿児島の実家に戻った理由は、父の車の運転が心配になったからだ。昨年母の七回忌で五月に帰省した際とお盆に帰省した際、父の車は普通車のセダンからオンボロ軽自動車に変わっていて、しかも軽自動車の車

体にかなり大きな接触事故の傷があったのだ。父に尋ねれば、セダンは車庫からバックで出す際に納屋に激突して廃車になり、安い軽自動車を買ったのだが、車体の傷は知らないうちに誰かにつけられたと言ひ張るだけだった。心配になった私は止むを得ず東京での仕事を辞め、南阿佐ヶ谷のマンションを引き払って鹿児島の実家に移り、今は要支援2の判定を受けた父の面倒をみている。

今となっては意地の悪い姑や情けない夫と別れて清々しているし、父のためにもいい結論だったと思う。でも、許されるなら久しぶりに再会した幼馴染たちや兄妹たちと楽しく大好きな東京でもうしばらく過ごしたかったのが本音だ。米寿くらいまで父は元気でいてくれるかなと希望を持っていたのだが、仕方ない。これも私の運命なのだろう。

母に俳句の手ほどきを受けたという私よ

り一回りほど年上のご近所の奥様が、私をなぜかひどく気に入ってくださって、最近毎日、様々な食物や品物を手にして我が家を訪れる。

朝7時だろうが晩の8時だろうが、雨が降ろうがやってくる。ひどい時は一日二度もやってくるので、いくら愛想のいい私でも相手をするのに閉口してしまふ。田舎はアポイント無しで家を訪問するのが当たり前なのかもしれないが、日曜の朝8時に「久子さんいる？」と玄関でする声にはため息が出る。

雨は嫌いだし、雨に負けずにやってくる。当然のように家に上がり込む厚かましい人間も大嫌いだ。でも、人生の先輩である方に、なかなか直接文句を言えないでいる私。

梅雨が明けたら嬉しいし、このご婦人の一方的な突然訪問が無くなれば尚嬉しいと思う。今日この頃。この拙い文章が「炬ばたセイ談」に掲載されるとしたら、その頃はとっくに鹿

児島の梅雨は明けているわけだが、梅雨と共に私の憂鬱がすべて吹き飛んでいることを切に願っている。



## 歳をとるといいうこと

入来院 重朝



最近字を書くことが億劫になった。つまり根気が無くなりつつあるのだ。歳を取るということが、こんなところに現れてくる。事実、歳を取ったということに、実際気付かされることはそんなにしよっちゅうは無いのだが、気が付くとやはり愕然とする。

つまり生きるというのは相当なエネルギーがいるのだ。歳を取るということは、つまり足が弱くなるのだ。足は第二の心臓だから、ここが弱るということは、結局死期が相当追ってきたということだ。しかしもうすぐ八十七歳になるところだが、まだすぐに死ぬわけではないから、我慢して足を動かしてなんと

か起き上がって、エッチラコと歩くわけだ。

人間はなんだかんだと言っても、しぶといからそうやって生き延びていくのだ。誰だっただろうと思う。死ぬまでには相当時間がかかるから。歳を取れば死にたいと思うことが多くなるが、だいたい九十近くなるとそれぞれが皆そんな感じだと思う。しかし、九十を過ぎて百近くになってくるとだいたい見ているとまるで人形様のようだ。自分の意思をはっきりと示していることはまずない。生かされているという感じである。

最近、テレビ等で西郷どんがよく出てくるが、実際はどんな人だったろうと思う。実際に実在した人物だから、想像しても限界がある。想いは限りなく拡散し、結局実像には届かない。空虚な観念のみがそこに残る。つまりいい人だった、立派な人だった云々。このことは仕様がないうのみだ。

現実の人生は人それぞれ独自の深淵を抱えている。人と比べようがない。ただ黙って人は己の人生を生きていく。その塊が世間を作っているのだ。

しかし人は何か一つのこと熱中することがある。それが故意に作られたものであるにせよ、ないにせよ一度この熱中にハマってしまうと人はしばらくこの渦から逃れられない。それが戦争であるにせよ、ないにせよ人は一度興奮すると、しばらくはその渦から逃れられない。しかし普段、世間は尋常に生きているから心配はない。

(炉ばたセイ談庵主)



第7回入来薪能『巴』(2010年8月28日)より

## 佐土原を訪ねて

— 歴史を訪ねる旅 (11) —



### 下土橋 渡

江藤淳氏（一九三二—一九九九年、日本の文学評論家）は、著書『南洲残影』でいわく、西南戦争における官軍と薩軍の対決は、決して開明派と土着派の対決などという、単純な図式で割り切れるものではあり得なかった。西洋をよく知りながら西郷の軍に投じた者もいたのであると。

村田新八がそうであり、『飢肥西郷』と呼ばれ親しまれた宮崎県日南市出身の小倉処平（しょうへい）がそうでした。そして、佐土原藩主の三男として生れながら、二十一歳という若さで鹿児島城山に散った島津啓次郎がいました。ちょ

うど十年前の平成二十年（二〇〇八年）の八月に島津啓次郎ゆかりの場所を訪ねたのが佐土原への初めての旅でした。

佐土原は宮崎市内中心部から国道一〇号を一〇数キロメートル北上した位置にあります。以前は宮崎県宮崎郡佐土原町でしたが、二〇〇六年に宮崎市に編入されました。

#### 一、佐土原藩

佐土原は大友氏に属する伊東氏の拠点地でしたが、天正六年（一五七八年）に島津義久・義弘・歳久・家久の四兄弟に攻められ、島津家久が地頭職になります。天正十五年（一五八七年）の秀吉の九州征伐によって、島津一門が秀吉の軍門に降った後も、家久の子・豊久が領地を安堵されます（石高二万八千六百石）。しかし、慶長五年（一六〇〇年）の関ヶ原の合戦で島津勢は敗退し、伯父義弘の敵中強行突破を支援すべくその殿を務めた豊久

が戦死してしまうと、領地佐土原は徳川家康に没収されました

その後、義弘の子・忠恒と家康との間に和睦が成立。家康は薩摩・大隅・日向諸県郡の所領を安堵し、忠恒を島津家十八代当主（初代薩摩藩主、島津家久）として承認し、慶長八年（一六〇三年）に征夷大將軍となり江戸幕府を開きます。

この年に、家康は没収していた佐土原を島津氏に返還しますが、返還先は豊久系の家ではなくて、垂水島津家でした。大隅国垂水の第二代城主であった島津以久ゆきひさが移封され、以後佐土原藩は明治までの二七〇年間、十一代にわたって続きました。

幕末は、薩摩藩と行動をともし、十一代忠寛は、明治二年（一八六九年）に戊辰戦争の激戦の功により、賞禄三万石を与えられました。

なお、藩主家が薩摩藩の陪臣垂水島津家の分家であるため、薩摩藩（島津宗家）からは従属の立場にあると見なされ、支藩的な扱いとなっていました。幕府側からは独立した藩として見られていました。

## 二、佐土原人形

今から四〇〇余年前の慶長の役（一五九七年）の後、朝鮮から佐土原に移り住んだ高麗の人たちが戯れに人形を作り始めます。それが佐土原人形の起りときられています。明治初期から大正時代には、窯元が十四軒もあって人形作りが盛んだったそうです。現在は、残された型を基に、町内二軒の製作所で製作が続けられています。

佐土原藩は京都の伏見に藩邸を持っていたから、伏見の文化も早くに入ってきたと思われ。古い人形は京都伏見人形の流れを汲むといわれ、節句物、縁起物、風俗物など



佐土原島津藩主の屋敷兼政庁跡に立つ佐土原歴史資料館・鶴松館



佐土原人形（義経千本桜・静御前と狐忠信、佐土原人形製作所・ますや）



佐土原人形（饅頭喰い、佐土原人形製作所・ますや）



佐土原銘菓・鯨ようかん（お菓子処・やよい堂）

が作られました。明治時代からは佐土原独特の歌舞伎組人形が多くつくられるようになりました。鰻頭喰い人形に見られるように、四等身と素朴さ、温かい彩りの調和が佐土原人形の特徴だといわれます。

佐土原の代表的な人形である『鰻頭喰い』は、「お父さんとお母さんどっちが好き？」と問いかけられた幼童が、手にした鰻頭を二つに割って「この鰻頭はどちらがおいしい？」と問い返したという逸話を持つ人形です。

『鰻頭喰い』は伏見で作られたのが最初といわれ、伏見稲荷の土産として各地へ運ばれるうちに、全国のあちこちで作られるようになったそうです。伏見などの『鰻頭喰い』が男の子なのに対して、佐土原では途中から女の子の『鰻頭喰い』が作られるようになりました。明治期から続く佐土原人形店『ますや』の三代目坂本兵三郎氏が、大正の初めに、人

形は女の子が持つから女の子にした方がいいとの思いから、女の子にしたのだそうです。それ以来、佐土原では女の子の『鰻頭喰い』が作られてきました。

### 三、鯨ようかん

佐土原の有名な銘菓に『鯨ようかん』があります。米の粉を練って作った餅をあんこで挟んで蒸した和菓子です。日持ちがしないため、現地でしか食べることができず、『幻のお菓子』とも言われるとか。他の場所では、宮崎空港一階売店で当日朝に作ったもの（数量限定）、東京にある『新宿みやざき館KONN E』で冷凍されたものが入手できるそうです。

佐土原藩四代藩主島津忠高が二十六歳で早世。その子・万吉丸は二歳にも満たない年齢であったため、世継ぎを巡って争いが生じました。その混乱の中、万吉丸の母・松寿院が「息子と藩が、大海を泳ぐ鯨のように力強

くたくましく育つて欲しい」と願いを込めて鯨に似せた羊羹ようかんを作らせたのが始まりと言われます。万吉丸は後に第六代藩主島津惟久となり、名君と慕われました。

佐土原町内には鯨ようかんを売る店が数軒あるそうですが、入ったのは、広瀬中学校下の国道一〇号沿いにあるお菓子処『やよい堂』さんでした。一折（九個入り）を購入して、店内のテーブルを借りて写真を撮らせて欲しいと奥様をお願いすると、実は『丸に十の字紋』を入れた当店オリジナルの重箱があるのでですよと言つて見せて下さるので、それを借り、詰め直してもらつて写真を撮りました。良い写真が撮れた上に、嬉しいことに重箱をサービスしてもらいました。そして、家に帰ったら、鯨ようかんの美味しさもさることながら、頂いた重箱に喜んだ連れ合いです。また行く機会があつたら重箱がもう一個

欲しいと言います。今度は、ちゃんと重箱入りで買うことになります。

#### 四、島津啓次郎

島津啓次郎は、第十一代佐土原藩主・島津忠寛の三男として、安政三年（一八五六年）佐土原に生れます。三歳で寺社奉行町田宗七郎の養子となり、十歳のとき、鹿児島に留学。藩儒学者のもとで儒学学修し、このときに西郷隆盛の『敬天愛人』の至誠道にも触れたといわれます。さらに翌年には、東京に移り、勝海舟門下生となります。啓次郎を初めて見たとき、その風貌と気迫に、『坂本龍馬の再来か』と驚いたという勝海舟は、啓次郎の眼を世界へ向けるべくアメリカ留学を勧めます。

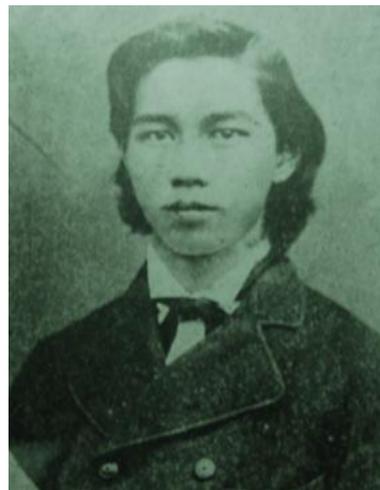
明治三年（一八七〇年）、薩摩藩費留学生として十二歳の若さで渡米。アナポリス、ニューハーベン、グリンブルドなどで英語、フランス語、文学、数学等を学び、アナポリス

ではアナポリス海軍兵学校に籍を置きました。留学中の明治六年（一八七八年）、留学資格の都合上の理由で町田家との養子縁組を解消、島津家に復籍。

滞米生活七カ年を経て、明治九年（一八七六年）四月に帰国。当時設立準備中だった学習院のポストが準備され、意見を聴くべく招聘を受けますが、その設立意図が、華族の子弟のみを教育するという旧態依然としたものであることに反発し、辞退します。

望郷の思いを抑えきれず、師匠の勝海舟に書いてもらった西郷隆盛あての紹介状を懐に佐土原へ帰郷。帰郷後すぐさま、廃仏毀釈により廃寺となっていた寺を利用して私塾を開き、集まった同志と一緒に生活しながら、学習会を始めます。アメリカで学んだ自由民主の思想や知識を伝えようとするものでした。

三ヶ月後には、周囲の奔走により私学校へ



島津啓次郎  
(1856~1877年)

と発展。帰国後構想を温め、準備を進めてきた学校『きよう文賢（きようぶんこう）』を立ち上げます。しかし、学校を立ち上げたばかりの明治十年（一八七七年）二月五日、鹿児島島の私学校徒が西郷隆盛を擁して決起。

有司専制（藩閥のエリートが独断的に政治を行うこと）の政府を倒すのだ！ 家族の反対を押し切り、『吾人の為さんと欲する所を為すのみ』として、啓次郎は立ち上げたばかりの学校を休校にして、西郷隆盛のもとに駆け

つけます。

しかし、西郷は啓次郎の参戦を拒否します。理由は、啓次郎が若く有為な人材だったこと、主家の島津氏の一族だったことなどによるとされています。しかし、啓次郎は佐土原の同志二〇〇余人とともに押しかけて参軍。啓次郎率いる『佐土原隊』は、熊本の各地を転戦しますが、薩軍側は次第に劣勢となり、薩軍の田原坂の戦いでの大敗北により、啓次郎は佐土原隊と共に佐土原に撤収。その後、単身上京し、つてを頼って隆盛の助命や事態の打開に務めました。が、うまくいかずに郷里、やむなく再度薩軍に合流、可愛岳、三田井、椎葉、米良、小林を転々とし、同年九月二十四日、城山にて戦死。享年二十一でした。

『小説島津啓次郎』（二〇〇三年一月、鉾脈社発行）の著者・榎本朗喬氏は、『佐土原藩史稿』の著者で元佐土原教育会会長、郷土史

家の桑原節次氏の次の言葉を、取り返しのない人材の喪失と、国家の危急存亡を憂う氏の名言としたいとし、その著書に引用しています。

— 彼をして寿を全うせしめれば、其の経綸によって国家に裨益する所、蓋し尠少でなかつたであらう —

（元九州職業能力開発大学校教授）

#### 【用語】

経綸 〓 国家を治めととのえること。

裨益 〓 利益となること。助けとなること。

尠少 〓 非常に少ない。

蓋し 〓 確かに。おそらく。たぶん。

#### 【参考サイトおよび文献】

・みやぎの101人（島津啓次郎）

・『小説島津啓次郎』（榎本朗喬著、二〇〇

三年一月、鉾脈社発行）

## 千本松原く仮説・日向松の由来

― 歴史を訪ねる旅 (12) ―

### 下土橋 渡



昔の濃尾平野は木曾・長良・揖斐の三大川が乱流していて、大雨のたびに、現在の岐阜県大垣市墨俣町より南の地域は、一本の川になって氾濫し、地域住民はこの自然の威力にただただ逃げまどうばかりでした。これに對して幕府は、大規模な治水工事を計画し、當時幕府につぐ強大な力を持っていた薩摩藩に藩の財力を弱めるため、その工事を命じました。これが『宝曆の治水工事』でした。この工事で薩摩藩は、30万両の大金と多くの犠牲者を出し、幕府役人の圧迫と病に苦しめられながら、血と涙と汗で見事に完成させま

した。総奉行平田鞞負は工事中に51名の割腹者と33名の病死者を出し、多額の費用を費やした責任を負い、大牧の本陣(元小屋)で宝曆五年五月二十五日割腹し果てました。時に52才。今日、西濃地方が順調な発展を続けていられるのも、こうした先人の偉業のたまものであります(以上、治水神社境内の『宝曆治水工事のあらすじ』より)。

著者が宝曆の治水工事由来の地である治水神社と千本松原を初めて訪ねたのは二〇〇七年六月のことでした。

木曾三川公園センター内にある高さ65メートルの展望タワーから眺めれば、南に一キロメートルにわたって千本松原の松並木がのび、右に揖斐川、左に長良川、さらにわずかながら左端に木曾川が見える光景はまことに雄大そのものでした。展望タワーを降りて千本松原の松林に入ると、樹齡250年余の

松の木は一人では抱きかかえられない程の幹回りの太さで、堂々とした風情があります。

木曾三川公園センターのすぐ下には、総奉行平田鞞負を祭神とする治水神社があります。正面に大きな丸に十の字の島津家の家紋が掲げられているので、てっきり、薩摩藩（島津家）によって創建されたのだろうと思いましたが、地元の人々の浄財によって、昭和2年（一九二七年）に起工し、10年の歳月を経て建立されたものだという事です。工事の犠牲者となった薩摩藩士80余名も境内にある治水観音堂に祭られていて、毎年、春と秋には義士の遺徳を偲び、慰霊祭が行われ、鹿児島からも多数の参加者があるそうです。治水神社の境内には薩摩鶏と思われる鶏が遊んでいました。

宝暦の治水工事で薩摩藩士たちによって、

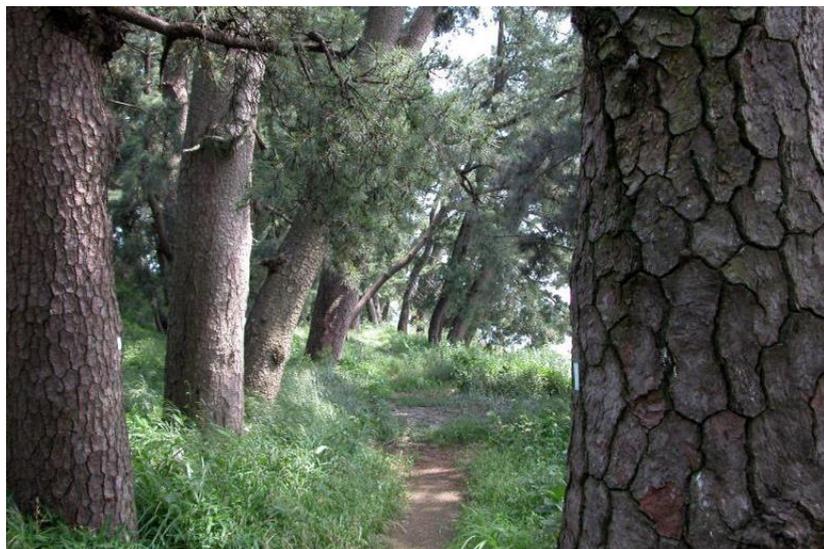
揖斐川と長良川を仕切る背割堤が油島（現在の岐阜県海津市油島）に完成したのは、宝暦5年（一七五五年）3月27日のことでした。

この日から、総奉行平田鞞負が書面で国許へ治水工事の完了報告を行なった同年5月24日までの間、薩摩藩士たちは、出来上がった背割堤に約1キロメートル余りにわたって千本の松を植えました。今日、千本松原と呼ばれている松並木です。

薩摩藩士たちが、油島の背割堤に植えた松は、日向松でした。日向松は文字通り、宮崎県産の松です。千キロメートル以上隔てた岐阜と南九州を行き来するには当時の交通手段では、片道25日間、往復50日ぐらいの日時を要したと思われます。松苗なら美濃地方でも調達できたはずなのに、資金が底を突き一両の余裕も無かった中で、わざわざ駄賃を使つて何ゆえ遠方から松の苗を運んだのか、



木曽三川公園センターの展望タワーからの眺望。中央が千本松原。右が揖斐川、左が長良川、左端にわずかに見えるのが木曽川。



千本松原の堂々とした風情のある樹齢250年余の日向松



総奉行平田靱負を祭神とする治水神社。地元の人々の浄財によって昭和13年（1938年）に建立された。



海路を利用した薩摩～美濃間のルート

そして薩摩の松ではなくなぜ日向の松だったのか。疑問が残りますが、そのことに触れた文献やサイトは見当たりません。ただ一つ、小説『霧の木曾三川淵―薩摩義士の血と汗と涙の物語』（ジェイボックス、一九九九年八月初版）の著者・瀬戸口良弘氏が、『霧の木曾三川淵』こぼれ話　く取材ノートからく『第四話・千本松原の由来』と題する記事を二〇〇七年当時インターネットに掲載されていました。しかし、この記事もまもなく削除され現在ではみることができません。削除の理由は、おそらく、瀬戸口氏の想像された一つの仮説だったからだということではないでしょうか。そのことを了承いたうえで、瀬戸口氏の仮説を紹介します。

瀬戸口氏は、幕府の役人が『薩摩より松苗を持参致して植林を致せ』と下命したのに違いないと考え、以下のように推測します。

当時美濃から薩摩に行くには、陸路を徒歩で関ヶ原く滋賀く京都を経て大阪に行き、大阪からは船（帆船）で細島港（現在の宮崎県日向市）着、細島から再び陸路を徒歩で、西都く都城く国分く鹿児島着の道順がありました。松苗を採取しに国許に向った小奉行ら一行は、大阪から細島港に到着すると、佐土原藩（現宮崎市）国家老の屋敷に宿泊することになり、思い切って松苗のことを相談しました。

島津藩とは親戚筋に当る佐土原藩は、今回の美濃の治水工事の下命を気の毒に思っている矢先でもありました。すでに時間的余裕はない、しかも資金も底を突いている状況を察した佐土原藩国家老は、佐土原藩士に命じて細島港までの道中の道端に自生している山苗を採取させ、細島港より桑名城下の『七里の渡』に直接船で運ばせたというのです。薩摩

藩士たちは、届いた松をホロホロと泣きながら植林しました。

宝暦治水工事から250余年。樹齢250余年の日向松は堂々とした風情で佇んでいます。鹿兒島県の有志から松くい虫に強いクロマツの苗木の提供や駆除経費の支援があるなど、鹿兒島県の有志とも協力しあつて千本松原の保護の取り組みがなされています。

また、治水神社の境内の一角に松の苗を育てている花壇があつて、『ぼくたちは、平成15年ここに千本松原の松ポックリより生まれた二世松（253年前の子孫）です。兄弟そろつて、元気に、この地で生きています。りっぱな松に育つように見守って下さい。木曾三川千本松原を愛する会』とありました。

（元九州職業能力開発大学校教授）



刀を鋤に持ち替えて～薩摩義士像（治水神社内）

## 能「高砂」と「西郷隆盛」からお国柄を考える



中西 喜彦

### 一、はじめに

今年二月に八十一歳となり、どうやら平均余命一年を元気に過ぎすことが出来た。何か凄く儲けたような気分になっている。

そこで、今年稽古する仕舞の曲目を、「高砂」同様お目出度い協能の中から「難波」とし、三月に皓月会春の会（福岡住吉神社能楽殿）で披露した。九月の宝生流教授嘱託会九州支部第六十回記念大会（大濠公園能楽堂）でも披露したいと思っている。

「難波」では百済の国から来た王仁が、今

度、仁徳天皇と言う立派な方が即位されたと唐楽の曲名を挙げながら祝って舞うものである。春鶯囀、秋風楽、萬歳楽、青海波、千秋楽、採桑老、抜頭の曲、など沢山の唐楽の曲名が出てきてそれが曲名と分かるまでちよつと戸惑った。

能「高砂」は六十八歳の時かごしま県民交流センター能舞台で皓月会大会が開催され、能「高砂」を披いた。そこで、再度その内容を検討してみた。

一方、今年は「西郷どん」がNHKの大河ドラマで放映されている。筆者は鹿児島市の山麓、東京の上野公園で大きな銅像にお目にかかつて六十三年になる。鹿児島で敬愛されているのは感じるが、どうも実像は良くわからない。落合莞爾氏は「日本教の聖者西郷隆盛」と紹介しておられるが、最近自裁された西部邁氏は「テロリスト西郷隆盛」と言つて

おられるのを聞いた。

前述の大河ドラマを時代考証した磯田道史氏は近著「素顔の西郷隆盛」で、「今から百五十年前西郷という男の強烈な個性をもつてしなければ、新しい日本は生まれませんでした。西郷が現在の日本国家のもとを作ったのであり、新国家を作るために、徹底した破壊を断行しました。制度設計として、江戸幕府を残してはいけないという激しい考えのもとに、維新をすすめ、今の日本の原型が形づくられました」とのべている。

ところで、今年、明治維新百五十年と言うが、世界情勢は幕末と類似したところがあるように思える。現在世界の超大国として君臨している米国は二度目の南北戦争の状態ともいえる。FRBに代表される国際金融資本連合に対して地場産業の戦いだとも言える。

これを馬淵睦夫氏はグローバリズムとナショ

ナリズムの戦いと表現して居られる。

また、トランプ大統領の我国初回訪問は我国と米国の関係に於ける実状を見た気がした。横田基地に専用機で入国し、海兵隊諸氏に訓示を垂れ、皇居への表敬訪問もなく、ゴルフ場に向かった。

幕末の国状に現在の政体を当てはめると我国は横田海兵隊政府(幕府)と永田町政府(京都所司代)で運営されているようにも見える。幕藩体制ならぬ横田海兵隊基地体制(欧米帝国主義の残影)からの変革の時期にあると思う。

そこで、我国の国體のあり方を、室町から現在まで約六百五十年に亘って上演され、特に江戸時代には式楽として維持されてきた能楽の最右翼「高砂」について調べてみた。

その一方、鹿児島に住む人間の一人として、この機会に、明治維新の立役者西郷隆盛の本



かごしま県民交流センター能舞台（平成16年6月6日）『高砂』。  
シテ（老人）中西喜彦、ツレ（老女）中西和夫。橋掛りから  
舞台に出て来たところ。

性に少しでも近づければと願う次第である。

また、この二つの話題をもとに我国の国體のあり方について考えてみたい。

## 二、能「高砂」でみる我国の姿

能「高砂」は、能にして神事に近いと言われる「翁」の次に目出度い曲とされている。

筆者は今頃になって改めて我が国の本質を描写した名曲と思うのである。

### （二・一）物語の概要

時は延喜の年（醍醐天皇の代）、肥後国阿蘇宮の神職友成が京都見物を思い立ち春風長閑な中、途中播州高砂に立寄ります。そこで老人夫婦を見つめます。老人は熊手、老女は杉箒を手に松の木陰を掃いています。そこで友成は二人に高砂の松と住吉の松を相生の松と言う理由を尋ねます。

すると、二人は心が通じていれば離れていても遠くはないと答えます。また、高砂は「万

葉集」の時代、住吉は「古今和歌集」の時代、

松は和歌の道のたとえであり、平和の象徴であるという。千年の緑をたたえた松の素晴らしさを説く老夫婦は松の精であった。住吉で待つと言ひ残して船出する。

続いて友成も土地のもの新造船に乗って住吉へ行くと、澄んだ月あかりのもと住吉明神が現れ、祝福の神舞を舞うという筋書きです。

(二二二) 舞台の見どころ聞きどころ

《次第》友成達が舞台に出て旅の目的を述べます。

《道行》友成達が無事高砂に着いたことを述べます。

《一声》老人と老女が熊手と杉箒を肩にかけて橋掛りに出て向き合います。そして謡いだします。

老人・老女 高砂の松の春風吹きくれて、

尾上の鐘も響くなり。

老女 波は霞の磯がくれ、

老人・老女 音こそ汐の、満干なれ。

老女は先に舞台の真ん中に出ます。続いて

老人も舞台の入口(常座)に出ます。

《サシ》

老人 誰をかも知る人にせん高砂の、松も昔のともならず、

老人・老女 過ぎ来し世々は白雪の、積も

り積もりて老いの鶴の、寝ぐらに残る有明の、春の霜夜の起居にも松風をのみ聞き馴れて、心を友とすがむしろの、思いをのぶるばかりなり。

《下歌、上歌、問答 略》

地 四海波静かにて、国も治る時津

## 《問答略》

地クセ

風、枝をならさぬ御代なれや。  
あひに相生の、松こそめでたかりけれ。げにや仰ぎても、こともおろかやかかる世に、住める民とて豊かなる、君の恵みぞ有難き、君の恵みぞ有難き。

然るに長能が言葉にも、有情非情の其声、皆歌にもるることなし。草木土砂、風声水音まで萬物のこもる心あり。春の林の東風に動き、秋の虫の北露に鳴くも、皆和歌の姿ならずや。(以下略)

中入

## 《待謡》友成

高砂や此浦船に帆をあげて、此浦船に帆を

あげて、月諸共に出で汐の、波の淡路の嶋陰や、遠く鳴尾の沖すぎて、はや住の江に着きにけり、早住の江に着きにけり。

## 《サシ》颯爽と住吉明神現れる。

住吉明神 我見ても久しくなりぬ住吉の、

岸の姫松幾世経ぬらん、睦ましと君は知らずや瑞垣の、久しき世々の神かぐら、夜の鼓の拍子を揃へて、すずしめ給え、宮づこたち

以下略

舞(神舞)を舞い祝福する。

## (二一三) 高砂の解説

本曲のシテは松の精と住吉明神である。

夫婦で波の音、風の声の中で四季を過(こ)し、松の木陰を清掃している。稲作社会では常に稲の周囲の雑草との戦いである。さらに、日

本文化が支那大陸文化と分離した時期の万葉集と、さらに進めた古今和歌集を日本文化の二親と言う形で示している。その精神を有情、非情のその声、皆歌にもるることなし。草木土砂、風声水音まで、萬物のこもる心あり」と述べている。

哲学者梅原猛氏は「草木国土悉皆成仏」という前述の思想を、西洋文明の元になった自我の哲学より優れており、「人類哲学へ」と提案している。

前段では老人と老女が繰り広げて語る古今和歌集の作られた延喜の良き時代の有り様を地（合唱団）は「四海波静かにて——君の恵みぞ有難き。」と謡います。この文節は江戸時代には年の始めに將軍の前で能の家元が袴着用で謡ったと言われている。

後段の待謡で友成が謡う「高砂やこの浦船に帆をあげて——」の文節は結婚式の際謡われ

ている。高砂から住吉までの旅行の風景である。この二節がもつとも愛誦されております。

ところで、住吉神社の御祭神は第一本宮（底筒男命）、第二本宮（中筒男命）第三本宮（表筒男命）、第四本宮（神功皇后）の四柱である。

三柱は人格神でなく海底、海中、海面そのものが御神体である。一方、これは縄文時代からの海人族の海中に潜ったり、浮き上がる時の神秘感を示したものではなからうかと言われている。本曲では月夜に神が宿ると言われる松の前に出て、皆に祝福を与えている。

すなわち、前段が弥生時代、後段が縄文時代を暗示していると思われる。

### 三、西郷隆盛の評価

#### (三・一) 西郷隆盛の業績

- ① 大政奉還を徳川慶喜に認めさせたこと。
- ② 江戸城無血開城を勝海舟との間で成し遂げたこと。
- ③ 戊辰戦争を扇動して勝利させたこと。

と。④西南の役で担がれ敗走したことなどが挙げられる。

しかし、各界著名人の西郷評を聞いても、生誕地や各種資料館を覗いても彼の本質を理解出来ないでいた。

今年六月、町内会が企画した西南の役跡を訪ねる一泊二日の旅で、宮崎県延岡市北川町俵野地区にある西郷隆盛宿陣跡資料館を訪ねた時何か心に響くものがあった。それは宿陣地が可愛山陵（えのみささぎ）の麓にあり、其処が天孫瓊杵命の御陵墓だと知っていて、あえてこの袋小路のような場所に宿陣したことが近年の資料で明らかになったからである。西郷は、政府軍が天皇家の先祖の墓に向けて砲撃できないであろうと考えたのである。事実政府軍は三日二晩にわたって攻撃しなかつたという。ここで西郷は薩軍幹部と最後の軍議をおこない「薩軍解散布告令」を出している。



薩摩軍最後の軍議（ここで薩軍解散布告令が決定された）。右から西郷隆盛、桐野利秋、村田新八。（西郷隆盛宿陣跡資料館）

軍議後、軍の重要書類と陸軍大将の軍服を母屋の空地で焼き、天皇家へ返却した気持なのであろうと言われている。また、最近辞世の句が発見され、句の内容から城山で作られたものでなく此処で作られたものであろうと言われている。

(三・二) 西郷南洲翁辞世の七言絶句

ほうすいほうさんみちすでにきわまる  
肥水豊山路己窮

ぼんでんかえりゆかんはとむなし  
墓田帰去霸凶空

はんせいのこうざいりようはんのあと  
半生功罪両般跡

ちていでなんのかんばせあつてしようこうにたいせん  
地底何顔対照公

実質上薩摩軍の最後の宿陣地が天孫瓊々杵尊陵墓麓であることを知り、西郷の本願は王政復古で明治維新に伴う西洋化とは違うので

はないかと思った。また辞世の句の最後に斉彬公にどんな顔をして地底でお会いしようかと述べている。

その斉彬公も藩主となり日向・大隅を視察した際、和氣清麻呂が、宇佐八幡宮神託事件に関連して大隅国へ遠島となったという場所に松を手植し、側近の八田知紀に命じて和氣公の遺跡調査を行わせた。この結果、この地が和氣公の配流地であったことが確定した。皇統からすると弓削道鏡事件は大事件で、和氣公は皇統を守った人として、京都御所の前に護王神社として祀られている。霧島市妙見の和氣神社は斉彬公の勤王の思想を表している。

さらに、西郷家は真方衆と言う全国ネットワークの隠密集団で隆盛は若きプリンスであるという。また、西郷の素性は本冊子で執筆されている中山とし子氏の調査にも見られる

ように南朝に繋がる血筋もあるようだ。

### (三・三) 西郷さんネットワーク

もう一つ追加したいことに江戸幕府体制下では、合戦の代わりに婚姻政策で各藩が勢力を確保しようとしたことである。薩摩藩で見ると重豪公（徳川家御台所、中津藩主養子、福岡藩主養子、八戸藩主養子）、斉宣公（松山藩主養子）、斉興公（近衛家簾中、岡山藩主養子、土佐藩主夫人）、斉彬公（徳川家御台所、近衛家簾中）となっている。江戸屋敷にこれらの藩主の子供さんが五十人以上居たとの報告がある。ネットワークの代表例が徳川家と島津家との関係である。篤姫と西郷の関係はとりわけよく知られている。

これらのことから、島津家の縁戚ネットワーク、全国展開の真方衆ネットワーク、調所笑左衛門を中心として構築した薩摩の財政力ネットワークが活用されたと推察される。

### (三・四) 西郷さんの気質

公家や藩主から遊女にまで信頼される性質とはどうゆうものだろうか。①敬天愛人、②子孫に美田を残さず、③命もいらす名もいらぬ人は始末に困るものなり、④大きく叩けば大きく響き、小さく叩けば小さく響く人。などが西郷の評判として残されている。

落合莞爾氏は西南戦争を次のように評価している。「つまり大西郷は、夢破れて滅びたのではなく、①四民平等の（オオヤケの代）実現のために自分を慕う薩摩農士のリストラを敢行し、②自らも進んでその群れに投じて榮譽と生命を一挙に捨てたのです。このどちらか一つだけでも通常の偉人ですが、冷厳と情熱の二つを同時に行った人は、世界史でもごく稀ではないでしょうか。

情においては到底できないことを、己の生命と引き換えに敢行する、これが日本独特の

任侠の真髓なのです（日本教の聖者・西郷隆盛と天皇制社会主義。二百五十頁、成甲書房）。

即ち、戊辰戦争が徳川慶喜主導、西南戦争が西郷隆盛主導の武士層リストラの為の八百長戦争だとするとその凄さに少し実像に近づけた気がします。

#### 四、我国の新時代に向けて

落合莞爾氏は我国の有り様について大変貴重な概念を提案して居られる。我国は縄文人、弥生人および古墳人の三大源流が共存しながら、豪族時代、律令時代、封建時代、武士の時代（名の代）を経て、明治維新によりオオヤケの代となり現在に至っていると言う。象徴天皇としての平成天皇を最後にオオヤケの代は終わり、今度は家族の代になると言う説である。

「家と族」とは、いわゆるファミリーのことではなく、人間社会を構成する不可分の最

小単位として「家」を中心とする時代である。

また「族」とは、遺伝子に刻まれた祖先の情報をも、個々の人生に取り入れることである。

家の問題は夫婦と子供を基本とした従来の単位が、それだけでは時代に対応出来ない状況になっている。しかし、色々な考えがあるので、ここでは省略する。

遺伝子の問題は特に重要な課題である。現在明治以降の都市部への人口集中や生活様式の変化で、散骨や樹木葬など、先祖と子孫の繋がりを切る動きがある。しかし、先祖あつての個人である。個人の能力や人生観は遺伝子半分、置かれた環境半分に左右されると考えられる。

#### 五、おわりに

高砂で現れる住吉明神は伊弉諾尊（いざなぎのみこと）、伊弉那美尊（いざなみのみこと）が日向の国（宮崎）あおきが原で禊をした時

に生まれた底筒男命、中筒男命および表筒男命が合体した方であり、能では「西の海、あおきが原の波間より」「現れ出でたる神松の春なれや」と謡って神舞で友成達を祝福します。

一方、西郷隆盛が「平生の功罪両般跡」と、天孫降臨した瓊瓊杵命（にぎのみこと）（神武天皇の祖父）の墓前で軍服を焼き近衛の役と初代陸軍大将退任を報告したことを知り、感激致しました。

我が国は百五十年前王政復古の考えのもと廃仏毀釈の名で寺院仏閣を破壊し、内戦を経て西洋化をめざしました。現在皇歴二六七八年で万世一系と国の歴史の長さを世界に誇ります。

しかし、泰平の眠りを覚ました米国ペリー提督の黒船来航から今や百六十五年。米国は第七艦隊を横須賀に寄港させ、横田海兵隊基

地を指令本部に、岩国や沖縄を手足にして全世界に睨みを利かせています。その大統領トランプ氏は日本に護っているから駐留経費を払えとか、米国製自動車をもっと買えとか言っています。

この四十年間、世界情勢は大きく代わりアメリカの凋落、中国の台頭は著しい。日米間では貿易摩擦ですむが、米中では貿易戦争に突入したと言われる。米国の状況は、経済、人種、安全保障など日本よりかえって不安定に見える。従って、各国に是々非々で臨むためにも自力で国を護る体制確立が急務である。微妙な建前でなく、本音で話すためにも、自主憲法を制定して、自分で国を護る体制が必要です。其の上で諸外国に臨むべきだと思います。

完

（鹿児島大学名誉教授）

## 編集後記・・・

■会誌十四号を無事発行出来て嬉しい限りです。重朝庵主は原稿提出一番乗の常連だったのですが、今年は何とも気が乗らないと筆が鈍く心配していました。しかし、結果的に例年のごとく大局的な内容のある文章を頂き感謝致しております。■最近認知症の方が近所で増え、対応に苦慮します。そこで市が委嘱している団体の「認知症見守りメイト講習講座」を受講しました。講師に、「医学的に認知症の方の特徴を『大きく叩けば大きく響き、小さく叩けば小さく響く』状態にあります。対応にはこの性質を理解して当たって下さい。所でこのような性質の方知っていますか」と聞かれ誰も答へませんでした。筆者が「西郷さんのことですか」と言つたその通りです。今まで多くの講義会場で、同じ事を質問しましたが、西郷さんの名前が出たのはあなただけですとのことでした。これを重朝さんの文章と重ね合わせて見ると、西郷理解の一面と現在社会の有様を垣間見たような気がしております。(中西)

■中西編集長に「炉ばたセイ談」十四号原稿募集のお知らせの葉書を五月一日に出して頂いた途端、五月初旬にはお一方から早速原稿を送って頂きまし

た。続いて、六月、七月と早々に送って頂き、順次編集を行い、著者の方に早い段階でお目通しして頂くことができ、編集がとてスムーズに行きました。ありがとございました。だからというわけではありませんが、十四号は原稿を頂いた順に掲載させて頂きました。■今回も西郷隆盛関連のお話をたくさん寄せて頂きました。今年は明治維新百五十年という節目の年でもあります。小誌が、NHKの大河ドラマ「西郷どん」ブームを機に、西郷隆盛のこと、明治維新のこと、西南戦争のこと、あるいは日本の近代化のことなどについて熟考してみる際の一助になれば幸いです。(下十橋)

### 「炉ばたセイ談」 第14号

炉ばたセイ談会会長 澁谷繁樹

編集担当 中西喜彦・下土橋渡

事務局T895-11402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

TEL・FAX 0996-44-3586

印刷 新大同印刷株 (0996-30-1811)



平成30年秋  
第14号

〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

炉ばたセイ談事務局